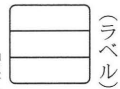


(表紙)

〔朱筆〕
「明治」



(ラベル)

号

〔海舟日記第八号〕

「海舟日記19」

從明治二己巳四月廿一日至同三庚午
十月廿三日
日記

(見返し)

常州 花和花次

筑波郡成瀬村

古川村

府中六社々家

田村則彦

神田永江町
(井カ)

木村兵庫之粹⁽¹⁾ 湯島天神中坂

芥舟⁽²⁾

渋沢徳太夫宅⁽³⁾
(篤)

大川喜太郎
虎吉 庄八

(1) 木村喜彦(又
助 もと浜御殿奉
行)

(2) 木村喜毅(も
と軍艦奉行)

(3) 渋沢栄一(静
岡藩勘定頭支配勝手
掛、商法会所頭取)

已進^(カ)

御使江百疋 上邸御門番式百疋 同中之口番式百疋

御用部屋式百疋

武内式百疋 紀邸御門番二軒百宛宛^疋

上田江百疋 寺江百疋 花代老朱

民部殿御留学金残⁽²⁾

拾三万八千式百廿五フランク

近々受取り可申旨御沙汰

智本院様御病死已暮

十二月廿四日 音羽大泉寺^{元寺}

引取候者 栗橋辺 名主武兵衛
幸手

(1) 武内孫介(和歌山藩士)

(2) 徳川昭武(水戸藩主)

米国より来状

昨^③私人打擲之事、

於^④横浜有之

仁和寺宮御通行

之時、パークス車より

引降されたり、

同国コンシユルも細川

家通行ニ同断

と聞く

後に聞く、行合

之人誰を不知

と云、又パークスに非

らず海軍士官也

手島昇助外扶

持代拾三両、林三郎^⑨

渡す

廿一日 ○英艦バシリスケ之船将ヒウライト豪傑之話等

小野清三郎会議所之話有之○

米国小鹿より来状、海軍学修行いたし度、政府より

ミニストル江一言御頼有之は入学出来と申越ス

野口次郎、早追にて駿府江遣す

廿二日

山岡氏^⑧ 手島昇助已下紀州より帰る、手前にて当分

育し遣す積

廿三日

谷麟之介金子無心

廿四日 留学者之事ニ付願書差出ス

岡田斐雄・千葉重太郎・津田真一郎来訪

廿五日

加藤弘蔵江留学悴之事頼ミ、猶駿河諸士扶持方増

し、山内公并其他江転言頼ミ遣す

(3) ゼユ・ブスケ
(フランス公使館通

訳官)

(4) 仁和寺宮嘉彰

親王(軍務官知事)

(5) イギリス特命

全権公使

(6) 海舟長男

(7) 静岡藩公用人

差添人

(8) 山岡鉄舟(静

岡藩幹事役)

(9) 林惟純(静岡

藩使番、幹事役附

属)

(10) 鶴岡藩士

(11) 鳥取藩士

(12) 津田真道(刑

法官権判事、議事取

調)

(13) 加藤弘之(会

計権判事)

(14) 山内豊信(議

定、議事体裁取調方

総裁)

箱館^三而阿州船
戦争、廿七日再
ひ戦ふへき約
ありと聞く

別二七兩
諸松廿八兩計^三
水穂屋卯三郎^三
廿四兩遣ス

於元江五兩遣ス

廿六日

廿七日 一翁子江一封を出たす⁽¹⁾

高見清三郎建言下案を見す⁽²⁾

廿八日

野口次郎駿府より帰る、中老の口上あり、我か申所
達せざるに似たり、野口之誤解歎我か誤歎

廿九日

武内半介江紀家長家一軒借用之事を談ス

晦日

梶谷隣之介江三兩遣す

昨、梶木大学来る、会藩箱館より帰りし者、再び

朝廷より同所江被遣たりと聞く

三条殿本日御着⁽⁴⁾

四月朔日 夜中歩卒江三兩式分遣ス七人⁽⁵⁾

二日 同歩卒江五兩遣ス十一人、同十六人江八兩⁽⁶⁾

(1) 大久保一翁
(静岡藩中老格)
(2) 鹿兒島藩士

(3) 清水卯三郎
(洋書・器具類販売
商)

(4) 三条実美(輔
相)

(5) 元歩兵朝日某
以下六人(會計荒
増)より)

(6) 三宅平太以

三 三条殿御弟、英江御留學之處、御呼戻ニ成ると云、是も攘夷説之徒より発す、此頃府下浮説紛々、一も取に足らず、また浮説より我藩心得違之向を生ず、可歎々々

鈴木秀次郎、鎮撫之事水戸家江申立候趣有之、舍居

よろしく頼度旨申聞ル ○◇宮島⁽⁸⁾ 山岡氏聞く、当節英⁽⁹⁾

公使式分金引替之事にて逢接、殊ニ六ヶ敷、又攘夷

之党浮説し、堂上是を恐れ、半信半疑成るを咎

めて怒争す、諸官是ニ堪へず、困難之極れりと◇

三日 川田貫之助早ニ而着

関口⁽¹¹⁾来訪、云、謹慎人之内土岐之手江被召捕、田安家江

引渡御吟味之所、和田輩空言不心得等ニ而御不審小

子江も掛れりと云、小子此程より説諭鎮撫等精力を

尽し、かへつて如斯、是昨年已来も亦如此、今また

何をか陳へむ

四日 土屋暢軒江返書差出す

◇津田真一郎、英之応接困難也、引替金は惣計

千式百万弗◇下車せしは英之海軍士官也、出逢し

者は此頃御調中也と云

下十六人（「會計荒増」より）

（7）河鱈実文（侍従）か

（8）宮島誠一郎（米沢藩士）

（9）パークス

（10）河田熙（静岡藩大目付）

（11）関口隆吉（静岡藩公用人）

五日

牧野江五百疋遣ス
引移リ二付
長岡藩
三島宗右衛門
伊勢喜手紙
小原重郎

六日 ◇昨夜、加州江、英之応接御困難ニ付大森辺固被仰付

中將様本日御着府、大森迄為御出迎参上

○◇願置候前様御事、御沙汰難被及旨御下ケ札有之

七日 山岡氏ヲ以て帰駿之事阿州侯江願ひしに、書付可出旨
御沙汰ニ付、明日差出積

青木文岱御免之事申聞る

八日 ◇駿河表見廻として参度旨相願

千葉重太郎聞く、北島氏両三日前帰府、山岡ニ可参旨、

且小金開拓之事半御採用可有歟、御用ニ可成人物

承度旨也

九日

山岡氏 武内聞く、明日 輔相公江英公使逢接之

事申込たりと、亦聞く、南部にて高尾丸船(高雄)

官軍に追撃れ自焼、古川拙蔵初六・七十人(船)

上陸、降伏と云

(1) 前田慶寧(金沢藩主)

(2) 徳川家達(静岡藩主)

(3) 三島億二郎(長岡藩士)

(4) 竹口信義(竹川竹斎の実弟 江戸深川の商人)

(5) 徳川慶喜(前將軍)

(6) 蜂須賀茂韶(議定 徳島藩主)

(7) 北島秀朝(東京府判事、東京開墾局知事)

(8) 三条実美

(9) 古川正雄(もと軍艦役並勤方、高雄艦長)

十日

駿河江見廻として出張之御暇被 仰付

○新谷藩本多良助・兵頭大八郎、前橋藩藤

井弘助来訪、頗る見解あり

雲藩小田舎人より使、松山藩奥平氏より同断

十一日

雲藩小田均一郎、山岡、関口、妻木来訪

十二日 留学入費之義願不叶

越藩酒井孫四郎来訪 千葉・山岡氏来訪

横井平四郎甥伊勢兄弟より来訪、并小鹿同断、

皆米国より之信なり

武内生、紀邸之義二付談有之

十三日 鳴鷺江通鑑綱目正編三函用立

川田氏江紀邸之談いたし

◇十四日 出立◇ 於元江五拾兩外式拾六兩預置

但留守中賄金也

(10) 奥平耆岐(中正衡)か

(11) 松江藩もと執政

(12) 妻木頼矩(静岡藩公議人)

(13) 福井藩士

(14) 横井小楠(明治二年正月五日暗殺)

(15) 横井左平太

(伊勢佐太郎と変名)と大平(伊勢多平太と変名)

(16) 田安慶頼(田安家当主)

(17) 福田敬業(江戸の書肆 金沢藩士)

十五日

十六日

十七日 着、途中越老公江一言ヲ申す

十八日

◇早朝、宝台院為御機嫌伺参上、猶亦御謹可然、天

下之形勢累卵と云者多し、御嫌忌ニ相触れ候ては

以之外の御事、且御家ニ而は益御勤、真の報国尽忠

にあらされは泉下 神祖江被対す、且千年之後迄も

御名節不可立と云意を言上◇

松平甚兵衛来訪、中老江口上并届頼遣す物

十九日

梅沢孫太郎(4)

廿日

赤松八兵衛

野村江頼ミ、横浜ワルス方江悴入用千両為替遣(5)

米国為替

(1) 松平慶永(議
もと越前藩主)

(2) 徳川慶喜

(3) 松平信敏(静
岡藩目付)

(4) 梅沢守義(静
岡藩大目付)

(5) T・ウォルシ
ユ(ウォルシユ・
ホール商会経営者)

肥田并松屋⁽⁶⁾
伊助江届方頼⁽⁷⁾

ス、甚太郎取次⁽⁸⁾

廿一日

伊奈兵庫 御暇願を浅野次郎八・織田泉迄差出、

周旋頼遣す

廿二日 大雨風

廿三日

大久保榿軒・白戸石介、諸事不意如と云^(マ)

廿四日

大久保一翁、宝台院ニ而も御暇は見合、何分今少々尽

力頼思召され度間、願書同人預り度由云々

廿五日 大木美元一郎、御扶持方申聞ル⁽¹³⁾
(藤見)

山高慎八郎・男谷勝三郎・宇都野鐘之允来訪⁽¹⁴⁾

松平甚兵衛

廿六日 疋田、東府より帰宅⁽¹⁷⁾

二月廿日

米国より来状、駿河屋久兵衛持参、高木・富田着二付一封⁽¹⁸⁾
⁽¹⁹⁾

(6) 肥田為良(浜五郎 静岡藩運送方頭取)

(7) 熊谷伊助(ウオルシユ・ホール商会番頭)

(8) 出島竹斎(小鹿村名主)か

(9) 静岡藩中老

(10) 織田和泉

(同)

(11) 大久保忠恕(三河赤坂奉行)

(12) 静岡藩書院組頭・沼津勤番組頭

(13) 遠江横須賀奉行支配、幹事役附

(14) 山高信離(相良奉行)

(15) 静岡藩目付助・横須賀奉行

(16) 宇都野鐘之進(静岡藩目付、中泉奉行支配割付)か

(17) 疋田正善(海舟次女孝子の夫)か

(18) 高木三郎(庄内出身 海舟門下)

(19) 富田鉄之助(仙台藩士 海舟門下)

并佐藤・金沢・岡田共々三封入手

長崎長江晋作来訪、先年伝習之節用達地役也^(九)

廿七日

兼蓮院^(一)・赤松静衛^(兵次カ)明日日出立二付、妻木江一封認遣ス

廿八日 高木三郎より佐藤并金沢・岡田江之書状、宅江遣ス

中老并金沢・林三郎江出状、并高木・関口江頼宅状

大木見元一御扶持二・三両月分調印相渡ス、且九月より

十二月迄之御扶持受取帳受取置

廿九日

織田泉・浅野次郎八、二万俵勤番組江御扶助

之事、并生殺之権当地にて御取扱可有事、

并御扶持渡方簡易二相成候事、屋敷地之

事性急不然へ^(子次カ)からと云他事申談

五月朔日 出勤 山田虎次郎^(二)来訪

勤番組御家来、当地并沼津江田園買候者は、其俵

(一) 海舟の伯母か

(二) 静岡藩勘定頭
並、公用人

居住不苦、力及ハす候者江は居住地被下候御趣意之旨、

御書付御差出可然と云

二日 酒井閑亭来訪⁽³⁾

佐々倉桐太郎、船越兵庫御家臣ニ引入度旨也⁽⁴⁾

三日 ○

越前公江一書ヲ出たす、日光之事、御歩行之事等也

○宝台院江参上

四日 水沢主水⁽⁶⁾ ○聞く、楮幣相場を不相立、一両は

一両之札にて通用可致旨、東府にて被仰出と云

五日 神田兵平江三兩遣す⁽⁷⁾ 関口より来状

六日 鉄炮拝借

中条金之助来訪⁽⁸⁾

七日

高橋嘉兵衛

八日

(3) 酒井忠績(もと姫路藩主 久能山

取締)

(4) 静岡藩運送方

頭取

(5) 織田和泉

(6) 静岡藩小島添奉行、幹事役附

(7) 会津藩士(会計荒増)より)

(8) 中条景昭(静岡藩新番組頭)

杉浦誠・関口良輔江一封遣ス

九日 牛妻辺遊歩、農主介左衛門二逢

駒井甲斐江一話

十日

妻木、東府より来る、越侯之云には、一翁・小子之内可出

と也、大久保氏・西郷氏共ニ引勝と云、不平成りと云聞

十一日

服部綾雄・藤沢長太郎・西周助来訪

十二日 以思召 三百両賜ハル

酒井閑亭殿、身分之事頼度旨内話

十三日

山岡江一封差立、妻木明日帰東二付て也

十四日

◇関口より文通、岩倉様仰ニ云、(1)寛 静閑院宮様御事、

京都ニ御止りニ付、御貯并御附之者御手当等被下置旨、且

(1) 静岡藩公議人
(2) 関口隆吉

(3) 駒井朝温(もと大目付、陸軍奉行並)か

(4) 松平慶永

(5) 大久保利通

(参亨 鹿兒島藩士)

(6) 西郷隆盛(鹿兒島藩士 鹿兒島で隠棲)

(7) 静岡藩中老、陸軍総括

(8) 藤沢次謙(静岡藩陸軍御用重立取扱)

(9) 西周(沼津兵学校頭取)

(10) 岩倉具視(十五日議定となる)

(11) 和宮親子内親王

徳川家御縁成るを以て、御貯五千両五百俵之内、半分

或は三分二進献可申上旨御内沙汰と云

左門殿来訪◇

十五日

藤沢・塚本⁽¹³⁾、明日沼津江帰る趣申聞ル、阿部邦其他一言申す

十六日 新撰組⁽¹⁴⁾、故国江帰度、旅用無心申聞ル、五両遣す

十七日 箱館之払郎人⁽¹⁶⁾、横浜江帰れりと聞く

十八日 箱館没落之風聞を承る

大久保一藏殿・山岡江一封差出す 岩倉殿御内名和緩⁽¹⁸⁾

江一封、共二関口江届方頼遣す

十九日

大久保四郎左衛門⁽¹⁹⁾

廿日 前田五左衛門⁽²⁰⁾

◇日光并久能、何れに神祖之御遺骸有之哉、御答

可申上旨、東京より申来ル

(12) 河野左門(静岡藩中老)

(13) 塚本明毅(沼津兵学校一等教授方)

(14) 品川二郎(三品二郎)と三品仲司(「会計荒増」より)

(15) 阿部潜(邦之助 静岡藩陸軍御用重立取扱)

(16) フリュネ・カズヌーブら

(17) 大久保利通

(18) 名和道一(周防出身)

(19) 大久保忠宣(静岡藩府中奉行支配割付)

(20) 静岡藩目付助

廿一日

東府之便ニ云、議定・参与他転被免たる者あり、西郷吉之助再度参与被命

廿二日

松平(1)甚兵衛、伏見前後之密話を聞、失策可歎

廿三日

廿四日 多穗江行

廿五日 小鹿村之御林を談す

廿六日

廿七日 黒沢某来訪、

郡建県之事御下問之趣申来ル ◇静寛院宮様御事、表向被 仰出

廿八日

平次郎、東京江出立、山岡江(2)関良之事并閑亭殿之事頼遣ス、録四郎出立ニ詫す(3)

(1) 松平信敏

(2) 関口隆吉

(3) 酒井忠恕(忠)

中川清次郎、織田江引取、江戸ニ来る屋敷願済と云

廿九日 山岡江一封今日差出

六月朔日

前島来助⁽⁴⁾

二日

三日

四日

俵沢江行く

五日 赤松静衛

六日

高橋伊勢⁽⁵⁾ 俵沢弥兵衛

七日 井上八郎、郡司之事ニ付縷々談有之⁽⁶⁾

八日 牛妻介左衛門云、荻野氏旧家之跡と云

九日 仙藩中川清二郎来訪、身分之事頼ミ申聞る

十日 近々東京江出府之事談有之、是金札正金ニ御引

十一日 替之被 仰出有るニ因る

績の弟 静岡藩側用人

(4) 前島密(静岡藩公用人、浜松添奉行)

(5) 高橋泥舟(静岡藩田中奉行、勤番組之頭)
(6) 井上清虎(浜松・中泉奉行、勤番組之頭)

留学入費

十二日 大久保⁽¹⁾より、沼津ニ変ある風聞申越す
十三日

◇当月九日出関口之書状到来、外国留学之者入費

弥 朝廷より被下置候旨也

十四日

十五日

十六日

十七日

十八日 出立 十九日 沼津 廿日 大磯 廿一日

廿二日 ◇紅葉山之銅御払代、大凡三万金計也と聞く

今朝、大久保氏江行く、大判之事并跡々御所置ニ可

応儀、其他小節目は大低御任せ被下度旨無腹

臆申立る◇、亦知判事進退之事内話

浜口⁽³⁾儀兵衛来訪、当時紀家之参政也、政事一変之

大趣旨内話、且相談有之 粹江金子到来

領主は
知判事と被
仰出

中老并平岡⁽²⁾
四郎江転末ヲ

示ス

去ル十八日粹并高
木・富田共留学
入費、六百弗宛

(1) 大久保一翁

(2) 平岡準(静岡藩勘定頭)

(3) 浜口梧陵(紀州の醸造業者 和歌山藩少参事)

被下置旨被達^御

信太歌之助 渥美新作

廿三日 信太歌之助

廿四日

廿五日 林三郎、藩知事細目被仰付写持参

大久保氏江行く、引替之事、三河之御高、昨年之年貢

昨夜張札^{アリ}、小拙
之事淫酒二溺れ
大奸、天誅可致旨也

米御下ケ之事并浜口之事内談、且金貨之事并

手記借置く 沼津より二万金着

廿六日

関口・黒河来訪 昨夜林より、同藩讒奸之転末

を聞く 戸川氏⁽⁴⁾・富永氏⁽⁵⁾より来訪、御領地之内

老万^(ママ) 石替地被 仰付、且御目付手扣六冊

借す旨にて為持遣す、受取置

廿七日

大久保殿江監察局之手扣六本差出ス、且引替金之事、

浜口之事等

(4) 戸川平太(安
愛 静岡藩中老)

(5) 富永雄造(同)

駿府江出状

◇吉兵衛聞く、築地江商社御取建、三井首となり去ル廿四日開店、御入用筋万端取まかなふと、此度も弍百万之金札御用立たり、又関東隔通融之為弍朱・壹分之金札商社より差出すへき也と、大低富家は皆其組二入れり、首裁は人選衆議を以てすと云

廿八日 中將様(1)より御魚拝領

中老衆より、清水家之事御願書写一見すへき旨申来ル

浜口儀兵衛、紀藩之官員・職制・俸禄をとふ

小田均一郎・小林雄七郎(2) 増上寺役僧念達

廿九日

昇子(3)、紀家江被頼へき旨申聞る

塩路嘉一郎・小林甚六郎(5)・手嶋昇助来訪

小林江内外之形勢を内告す、尽力可為様子也

晦日

旧会藩小島七郎来る、心情を告ぐ、甚宜敷、且身分之頼

平兵衛江為持
松屋伊助方江
出状并

(1) 徳川家達(静岡藩知事)

(2) 長岡藩士(小林虎三郎の弟)

(3) 手嶋昇助

(4) 和歌山藩参政

(5) 小林政富(静岡藩権少参事、監正掛)

(6) もと軍艦頭、酒田で降伏

米国江一封差出ス

申聞る ○上邸江出勤 柴誠一を訪らふ

毛受洪・小田均一郎・吉田郡助等留守江来訪

七月朔日 駿河より来状

黒川彦七郎江五拾両借遣す

○島津帯刀(8)豊後之(9)長崎助八郎来訪、当時聖堂

入塾之由、且聞く、三条殿・岩倉殿御子息并薩摩

之世子其他家老之子等多く入塾なりと云

二日

本日、引替金
之内拾一万兩
納む

木戸準一郎殿江尋ぬ、伊勢新左衛門(11)元北条(12)に出会、往昔

を話す、木戸氏江約して學術之者等姓名を可申旨、

猶種々之話あり ○薩州より天璋院様御広敷江(13)

三千兩を被送(14)是は大久保・小拙江預候事
有之故也

◇近々英国公子渡来、出府之折は、芝・上野玉屋一見

之旨申立候間、掃除等明日中致置可申旨御達

恐らくは太守之弟歟
島津軫彦(15)
吉利吉之進(16)

(7) 福井藩士

(8) 黒岡帯刀(島津久直の子息 大学

校生徒 豊後の子は誤り)

(9) 島津久宝(島津家一門加治木領

主)

(10) 長崎省吾(鹿

児島藩士 大学校生徒)

(11) 木戸孝允(山口藩士 八日待詔院

出仕)

(12) 伊勢華(北条瀬兵衛 山口藩士

七日倉敷県権知事に任ず)

(13) 十三代將軍家定夫人敬子

(14) 島津忠義(鹿児島藩主)

(15) 島津珍彦(島津久光の三男 大学

校生徒)

(16) 大学校生徒

(17) エジンプラ公(ヴィクトリア女王第二王子)

東条正左衛門⁽¹⁾
増山八彦⁽²⁾
種子田清左衛門⁽³⁾
寺田平之進⁽⁴⁾
最上孫左衛門⁽⁵⁾
河島新之進⁽⁶⁾
肥後平八⁽⁷⁾
岩切喜次郎⁽⁸⁾
大寺矢七⁽⁹⁾
島津帯刀⁽¹⁰⁾
議論慨切可感

三日 平兵衛江廿五両、忠蔵江拾五両遣す

薩州書生拾式人来訪 ○本日御暇被 仰出

戸川平右衛門殿、大蔵太輔殿内告之口上密話

○三河十一万石之郷村高帳御渡、且昨引替金

上納之所、大判は西京にては廿七・八両之相場なれとも、

当地にては猶可伺旨御下知有之と云

四日

杉浦誠⁽⁷⁾ 土藩沢田衛守来訪

町田五位、渋沢徳太夫御暇之事頼手紙、林三郎江渡ス

五日 從駿中川清次郎来ル、国許都合よろしく被免候旨也

春嶽公江参上、段々愚存申上ル

留守宅江肥前大坪万平、薩吉利祐介・同吉之進、

土谷武馬・同横山彦太郎・南部彦蔵・壬生拙次郎、

其他薩州士数人尋問之由 ○田辺藩柏木常雄^(兵衛事)

来訪

(1) 大学校生徒
以下八名も同じ

(2) 種子田誠一

(3) 寺田弘

(4) 最上五郎

(5) 河島醇

(6) 戸川平太

(7) 静岡藩公議人

(8) 大学校生徒

(9) 町田久成(外
国官判事 十日外務
大丞に任ず)

(10) 仙台藩士

(11) 松平慶永(民
部官知事 八日民部
卿となる)

(12) (17) 大学校
生徒

六日

宮嶋誠一郎、土之毛利恭助来訪、昨日来訪

之肥前人已下悉く来訪

◇大久保殿より、岩倉様江今日参館、心裡可申上

旨申来る、即刻参堂、駿藩所置之事申上ル◇

薩寺田平之進・最上孫左衛門・河島新之丞

来訪

七日

一翁殿より来状、バツヘルモーレン之事申越

浜口儀兵衛、同人大久保殿江参る二付、愚存所置書付

御同人より岩倉様江差出す

島津帯刀・八代幸次郎来訪

寺田・最上・河島来訪

土藩魚宮陵三来訪

村田新八・田中清之進来訪、昨年来之事

申出一笑、再会を歎す

(18) 高知藩公議人

(19) 大久保利通

(八日待詔院出仕)

(20) 岩倉具視(八

日大納言に任ず)

(21) 大久保一翁

(静岡藩権大参事、

藩政補翼兼家令)

(22) 八代規(鹿兒

島藩士 大学校生徒)

(23) 鹿兒島藩士

(24) 鹿兒島藩公用

人

八日

柏木兵衛并(1)中金称平、伊予松山侯より金札

式百両借用す 薩書生前田十郎左衛門外吉人

林三郎 中将様御暇出立御差免被 仰出并藩

知事已下職名被 仰付 ○駿河一翁子より来状

九日

駿河江愚存伺書之下案遣ス ○浜口儀兵衛・津田(3)

又太郎江一封を寄す ○宮島誠一郎より来状

林三郎

十日 島津帯刀并式人来訪 十一日

毛利恭助来訪 ○大久保殿江一書、諸記并城図

進献之事、并過日之愚存如何哉之旨承ハる、留守無返書

○薩之谷生、(本元)倅之伝言申聞る ○大島友之允来訪、朝鮮

江昨年中参り居候旨、且情実之話あり

次郎八殿昨着之由ニ而御来訪(6)一翁子之文通、五万両
十四・五日之内ニ着之手続等申来ル

米国より帰
谷本兵右衛門

(1) 中金正衡 (奥平彦岐)

(2) 久松勝成 (松山藩知事)

(3) 津田出 (十三日和歌山藩権大参事に任ず)

(4) 谷元道之 (外務権大丞 鹿兒島藩士)

(5) 殿原藩士 十二月一日殿原藩参政職となる

(6) 浅野次郎八 (静岡藩権大参事、政事庁掛)

浜口儀兵衛、^明昨日出立之旨使あり

十二日 浜口より一翁子江届物さし越、明日出立と云

土藩下村慶太郎・福田半蔵来訪、壬生拙次郎江頼書^出

を渡す

十三日 大嵐、東風颯也

浜口より大久保江之届物、富永江託す ○宝台院之

御時計出来二付、溝口氏江附シ駿州江遣す

中将様明日御出駕二付出殿、白縮布一反拝領ス

横井左平太、当時沼川三郎、米国より帰国、悴之巻封

相達ス、フランシスコよりニールク之鉄道落成、米里三

千里八日二達すと申越す 修平子外国行之

事相談

十四日

手島敬児 薩河島新之丞来訪 ○雲州侯江、飯

塚修平子外国行之素願申遣ス

土
南部彦蔵

小山茂平太
宮地堅一郎

楠本禎兵衛

(7) 富永雄造(静岡藩権大参事、刑法

掛)

(8) 溝口勝如(八十郎 徳川家達家

令)

(9) 飯塚納(松山藩士)

藩士)

(10) 松平定安(松江藩知事)

江藩知事)

土藩六人來訪

鈴木友之助

於元江

拾兩宛遣ス

中尾捨吉

十五日 薩堀清之丞來訪、当日蝦夷より帰府、情実(1) 悉く承之

島津(2) 函書外一人來訪

十六日

土藩中尾捨吉・内田恒次郎・信太歌之助來訪(3)

雲州邸江参り主公二面会、能勢・飯塚留学之事

内話

十七日 安井実之丞帰参之事申聞ル

勝木生・小田均一郎來訪 服部庫之進

大久保殿江参ル、海江田武二・(5) 肥田 (6) 之知県事松形一郎

江面会、大久保殿江日光之事其他内話ス

十八日

◇外務大丞被 仰付◇ 小田均一郎・林三郎來訪

十九日 関口良輔來訪

今晚七ツ時、三条殿御使吉田左寿郎來訪、今夕是非参(7)

(1) 堀基(開拓使)

大主典 鹿兒島藩士
海舟門下)

(2) 島津久治(久
光の次男 もと宮之
城領主、鹿兒島藩家
老)

(3) 内田正雄(も
と軍艦頭 権判事
二十四日大学少丞に
任ず)

(4) 刑法官捕亡司
権判事

(5) 海江田信義
(刑部大丞 鹿兒島
藩士)

(6) 松方正義(日
田県知事 鹿兒島藩
士)

(7) 三条実美(右
大臣)

◇宝台院慎御免
被 仰付候ハ、小臣
豈微力を厭候
ハむ哉、此事表向
申上難く、内情
御高察奉願云々◇

薩藩
山本権兵衛⁽¹⁰⁾

殿可致旨也 関口良輔来訪

◇三条殿江参上、段々内外之情并微力難及御免
之事歎願、強而辞表を差上◇

佐土原藩知事来訪⁽⁸⁾

廿日

大久保殿江一書、内情 前様御免之事申遣す

信太歌之助、刑法官捕亡方之者五・六十人、昨日被免

と云 ○大久保一翁并宅江此節之情実申遣す

薩藩士五人、土之中尾捨吉来訪

浅野・戸川殿来訪

廿一日 金井鉄三郎天狗、可笑、自負甚たし

大久保四位殿来訪、心裡を申す、且三条殿之仰を

承ハる、皆御懇切之御意なり、拝承、難忍といへ共、

宝台院御宥免之御事不可止

小河弥右衛門殿来訪、温行之君子、可敬服⁽¹¹⁾

(8) 島津忠寛

(9) 大久保利通
(10) 大学校生徒

(11) 小河一敏(堺
県知事 岡藩士)

廿二日

佐土原藩知事侯来訪、御三男、宅江滞留之事御頼ミ

有之 ○松形一郎殿来訪、懇々話有之

◇三条殿より御使、可致参館、拜謁之上、宝台院御事

御慎御有免ひとへに懇願、此事一死を期して奉願る

心裡言上、余カラフト・対馬并外国情実言上、奥羽之

人氣・人物等に及ぶ◇

廿三日 土ノ中尾捨二

表向辞表、以公用人差出◇、一翁子・甚兵衛江一書ヲ出ス

小田均一郎、水野彦三郎来訪 ○薩参政黒田

了介来訪、懇々之話并函館表之転末承之

土藩本領兵衛外式人

薩柴山四郎兵衛・木村吉之介・大山誠之介・木藤助七・

岡田敬介来訪

廿四日

薩 久保武之介

(1) 島津(町田) 啓次郎

(2) 松平信敏(静岡藩権少参事、政事 庁掛)

(3) 名古屋藩士

(4) 黒田清隆(外務権大丞 鹿兒島藩士)

(5) 久保春景(大 学校生徒)

東条庄左衛門
⁷ 渋江軍兵衛

黒江幸介
島津図書

¹⁰ 小島七郎江
三両遣ス

深川鈴木丁
⁷ 中立庄太郎方

廣沢子

肥後

横田勘次

米沢

¹⁶ 戸利総八郎

¹⁷ 畠山潮平

⁶ 甘粕備後、佐土原小曾川実、岩国参政堺務来訪

薩書生数人来訪

聞く、昨大久保殿・⁹ 広沢殿参議拜命と云

廿五日 英之公子軽装なりしと聞く、小田之話

金沢聞く、明日英公子築地江来る歟之説あり

廿六日

¹¹ 伊達五郎 杉浦誠被召へき歟之事内話有之

小田均一郎、雲州より公用人米式百俵引出、酒色

に用ひ尽す歟、雨森并河田貫輩共二計りし哉

之内告あり

廿七日 飯塚修平、海外行聞濟相成候由、礼申聞る

林三郎、山川大蔵来りたき旨頼み申聞る

廿八日 駿府宅より来状

浅野次郎八殿、杉浦并佐久間等之事、¹⁸ 戸田和州両山

之世話等件々内談

(6) 甘糟継成(待
詔院下局出仕 米沢
藩士)

(7) 大学校生徒

(8) 大久保利通
(二十二日参議とな
る)

(9) 広沢真臣(民
部大輔、参議 山口
藩士)

(10) 会津藩士

(11) 伊達宗興(十
一月和歌山藩権大参
事となる)

(12) 雨森謙三郎
(松江藩公議人)か

(13) 河田熙(静岡
藩少参事、学校掛)

(14) 山川浩(もと
会津藩家老)

(15) (16) 大学校
生徒

(17) 上杉勝賢(茂
憲の弟 大学校生徒)

(18) 戸田忠至(宮
内大丞 もと下野高
徳藩士)

杉浦誠、箱館江被 命候ハ、尽力之決心可然と云、承

服也 ○岩国藩佐伯清太郎

小林甚六郎 ○宮島誠一郎・甘粕備後

佐土原町田啓次郎・曾小川彦千代、宅江滞留

廿九日 英公子、紀邸江御招待有之

◇⁽¹⁾山岡鉄太郎昨夜着、宝台院様小臣此度之事

御案二付、出府と云◇ ○信太歌之助

小田均一郎・赤木真澄、国許改革之事内談之書付持参

曾小川実、子弟兩人之食^(マ)領料・金札持参

南部彦蔵 四ノ宮二郎、因州脱走之話、身分頼ミ度段

申聞る ○三条公森寺頼之輔より文通、今或は晚

^(衍カ)晚参館可致旨也 ○佐久間藩五郎段々心裡内話

八月朔日

佐伯清太郎・小田均一郎・赤木真澄

三条公より、明夕拜趨可致旨森寺氏文通二度

金沢藩

沢田権兵衛

河波金六郎

薩藩

寺田平之進

(1) 静岡藩権大参事、藩政補翼

政 (2) 松江藩もと参

(3) 佐久間信義 (もと静岡藩御用人)

(4) 大学校生徒

土藩
小木達枝

宮内雄蔵⁽⁵⁾
河島新之丞⁽⁶⁾
和田次郎左衛門⁽⁷⁾
上林彦之丞⁽⁷⁾
湯地藤十郎⁽⁸⁾
有馬宗右衛門⁽⁹⁾
岩切喜次郎⁽⁹⁾
大坪万平

有之、公本日霞関福岡邸江御移居之旨也

吉兵衛、金札不通用并式朱金偽金出候旨内話

二日

山川大蔵いまた客気を不遁 ○小田均一郎 四宮二郎

土藩大久保某 肥前大坪万平 山岡氏 信太歌之助

同人身分之事二付、津田橋次郎江一封認遣ス⁽¹⁰⁾

◇夕三条公江参館、種々御説諭并函館之事并塩⁽¹¹⁾

田順庵・杉浦之事、海外之形勢交際等之言上、

静岡藩所置之事、表向申上可然と云御内沙汰有之◇

三日 杉浦外務出仕と云々被 仰付たりと聞

佐伯清太郎 粟屋・有田・三好江一書を届方頼む

浅野氏江、増扶持御伺之方可然三条公御内教之旨

申遣す

四日

小田均一郎、藩内之事談話 ○土藩魚住直

(5) (9) 大生徒
生徒

(10) 津田正臣(和歌山藩士)もと民部官権判官事 津田出の弟

(11) 金沢出身もと箱館医学所医師

(12) 杉浦誠(八月外務省出仕、唐太地取調御用掛となる)

土藩
容賀才介

五日

浅野氏、増扶持五ヶ年平均之書付返ス ○塩田順庵
江 三条公御沙汰之旨申遣ス、返書、近日可来訪と云
甘粕備後 四ノ宮二郎、身分定りたる礼申聞る

浅野氏、増扶持願・御簾中様御引移り其他

等御相談 ○山岡氏、小拙御免願之事越前殿・

大久保殿江話候旨内話有之

塩田順庵老、三条公江御内話申上候事、并五□

□家之大趣旨等談ス ○小河弥右衛門より来書、

急々出立之旨申越ス

六日

確堂殿より鮎二籠被下

島津函書 柳川藩立花紀伊来訪

津田真一郎・小田均一郎 小田氏明後日帰国と云

三条公御内森寺氏江塩田之事申上置

七日

一翁子より来状、無別段事

(1) 徳川慶喜夫人
美賀子

(2) 松平慶永(八
月十二日民部・大蔵
卿となる)

(3) 松平齐氏(も
と津山藩主)

(4) 津田真道(静
岡藩権少参事、政事
庁掛兼学校掛)
(5) 森寺常德

薩州
永吉藤五郎

増扶持願出ル

赤木真澄、雲藩給録取調之事相談有之 ○和田秀

太郎、別手江出役之事頼ミ、町田氏江可参旨談遣す

山岡氏、徳大寺公江拜謁、小拙御職辞之事相願と云

信田歌之助(本) 津田橘次郎参り頼候旨、本日越前家遣ス

八日

山岡氏、辞職願知藩事より差出候旨也

越前伊藤友四郎より手紙来る

明九日四ツ時出 営可致旨、弁官執事より御達

九日 堀清之進外屯人來訪

◇本日出営、辞表不被及御沙汰之御下ケ札にて御返相成、

知藩事より退職願差出ス◇
小臣

浅野氏より来書、小紙札可造之御願、於民部見合候様

御沙汰、是前日不可然と云もの小吏不聞、将して不被行

国之幸といふへし

十日

祐助(8)来る

薩人云、中原(9)猶介は越後にて

(6) 徳大寺実則
(大納言)

(7) 大学校生徒

(8) 吉利祐介(鹿
児島藩士 大学校生
徒)か

(9) 戊辰戦争中海
軍参謀

伊東正太⁽¹⁾
有馬次兵衛⁽²⁾
有馬幹太郎⁽³⁾

加州

沢田権兵衛⁽⁴⁾
還⁽⁵⁾

薩州

黒江幸助

東条正左衛門

渋江軍兵衛

海軍塾之世話ス

十一日

戦死せり、国人甚惜むと聞く

関口之弟、肥後之沢村江倍從出立いたす二付、暇乞申聞る⁽⁴⁾

◇黒田良介殿、一昨外務権大丞拜命と云、且海陸軍備、⁽⁶⁾⁽⁷⁾

北蝦夷之御所置、耶蘇之事、払郎脱走人之事并

貨幣融通之事等見込承度旨◇

肥田浜五郎、民政局よりバツヘルモール一見いたし呉候様⁽⁷⁾

某申聞たる由

十二日

林三郎⁽⁸⁾ 本日増扶持伺之通可致旨被 仰出、嗚呼

昔日之苦心到于今日る、誠ニ寛大之御恩典、諸子

忘却するなからむを祈る而已 静岡一城残置、跡

は可取壞旨、是亦伺之通被 仰出◇

◇夜二入弁官より御達、明十三日午之刻礼服装着名代

参 朝可致旨◇

(1)～(3) 大学校生徒

(4) 関口潜か

(5) 沢村脩蔵(も)と民部官庶務司知司事

(6) 黒田清隆ただし外務権大丞となつたのは七月十八日

(7) 肥田為良(静岡藩運送方頭取 十五日民部省へ出仕)

(8) 林惟純(静岡藩藩政補翼手附)

十三日

浅野氏江、公用人名代之事并静岡江一封頼遣す

毛利恭助、沼間慎次郎・永持五郎次借受度旨申聞

浅野氏・松平勘太郎来訪、大参事已下役々御伺下案

持参、相談有之、早速差出度、可然旨答

野口次郎職務被 免御書付、織田又蔵名代二而

相済、口宣同人江返上渡遣す◇

十四日

朝、大久保殿江行く、過日已来之礼、且 三条様江可然

御礼願置、蝦夷之事、魯西垂人之説、対州支那

互市之事并海軍学校之事内話、御同人可然と被

申聞

本日、大参事已下御伺書差出ス、出邸

越前殿より認物之礼申来る ○金沢あらひや馬之

事、村井⁽¹⁴⁾・岡田之内話申聞る

(9) 浅野次郎八

(静岡藩権大参事、政事庁掛)

(10) 沼間守一(もと歩兵奉行並 明治

二年赦免)

(11) 永持明德(沼

津兵学校三等教授

亨次郎の養子)

(12) 静岡藩公用人

差添役

(13) 静岡藩公用人

(14) 村井正太郎

留守江来訪

水野彦三郎
四ノ宮二郎

土州

木部学一郎
吉川次郎
小山茂平太
都築亮斎

十五日 浜武慎助帰府⁽¹⁾

出邸、アラヒヤ馬拝借、⁽²⁾ 弘郎人江借渡ス旨、浅野氏初無

異存と云 黒田良介殿蝦夷地之事内話、且昨年

来之転末等話す、一笑一歎

十六日

大久保殿より今五時可参旨文通有之

◇夕刻大久保殿江参上、⁽³⁾ 副島二郎殿二面会、海軍塾

取立之事可然と承る、近々教授人召集へく、屋敷撰

むへしと、亦海陸之御兵備、東京之取締、其他見込可取

調旨也◇

十七日

赤木真澄来訪 林三郎、明日静岡江出立之

趣暇乞、宅江一封餞別為持遣す

十八日

⁽⁴⁾ 加藤弘蔵江、魯西亜江留学帰府之者承合ニ遣ス

(1) 熊本藩出身

(2) デュ・ブスケ

(3) 副島種臣(参議 佐賀藩士)

(4) 加藤弘之(大
学大丞)

土州
真田衛守

肥後

河野丑次郎

同国にて

洋船五隻

ありと云

市川

緒方三郎

大筑彦五郎

田中次郎

小沢清次郎

当時田中と云

三名開成所出役

大竹江

拾両遣す

兼母病死

十五両遣す

小城藩

松田又之輔

肥後河野丑次郎来訪、竹副・古庄江趣意書為見

呉候様頼ミ遣す、且見識之陋なりしと申遣す

◇松平勘太郎、川々御普請として、金五万両無利足にて

五ヶ年賦返上御借渡之旨、其他三・四ヶ条相談

慎助、肥後藩河野丑次郎聞く、竹副・古庄之輩、奥州

にて仙台侯江面会、奥羽連衡、九州は肥後盟主

に周旋連衡すへき杯議あり、肥後人も半は同意之

処、終ニ奥羽之瓦解にて猜忌を蒙れりと云

大久保殿江、魯国留学帰府之者名前申遣す

十九日

会津大竹万吾 桑名・松山御所置濟

廿日

本日、大参事已下被仰付 松平勘太郎出立

薩書生四人来訪

廿一日

(5) 竹添進一郎
(熊本藩士)

(6) 古庄嘉問
(同)

(7) 伊達慶邦(明治元年十二月隠居)

(8) 市川文吉(ロシア留学中)

(9) 緒方城次郎(ロシア留学より帰国 洪庵の三男)か

(10) ロシア留学生 帰国後の二年八月開

拓使大主典となる

(11) (12) ロシア留学より帰国

(13) 松田正久(天学校生徒)

米

大滝新十郎⁽¹⁾

島津図書

薩 三人

駿府より増扶持御触其外来状、浅野氏より差越

大久保一蔵殿海陸兵備之取調、東京究民之見^(マコ)

込等取調可申旨、其他賈金御所置、蝦夷之御所置、

惣長之事等御内話、見込申述ぶ◇

黒川彦七郎 宮島誠一郎、大久保殿江引合す

廿二日 脱走慎人江五両遣す⁽²⁾

廿三日 海軍之所取調出来^置

廿四日 九州大水にて上方辺米価騰貴と云^{十石}十五兩程二及

◇大久保殿江参上、海軍存寄書差出、且東府内貧

民撫育之事并開墾功者之姓名等内話◇

吉井幸輔二面会、当節公議所にて海軍之論議⁽³⁾

興れりと聞く

廿五日 加州家々老、国許にて暗殺之事有りと聞⁽⁴⁾

赤木真澄 青島幸次郎、東府貧民教育之書

付持参 ○宮島より、甘粕国許之老母大病、昨⁽⁵⁾

(1) 大学校生徒

(2) 船越鎗太郎・増村篤兵衛以下十一人「會計荒増」より

(3) 吉井友実(二十五日)彈正大忠より彈正少弼となる鹿兒島藩士

(4) 本多政均(金沢藩執政 八月七日)暗殺

(5) 甘糟継成(待詔院下局出仕 米沢藩主)

御暇にて出立、此段伝言被頼候旨申越

◇黒田良介聞く、近日西郷⁽⁶⁾氏御召御用之事周旋ニ而、近く、勅諭御差下之御決議ニ成れりと、同人見込にて、三条殿下御西征にて御召連可有之趣意なりしか、いまた其御場合ニ不到と云

廿六日

宮地⁽⁷⁾正夫、兩三日前箱館より清水谷⁽⁸⁾殿御供にて出府、同地居民饑饉不可救之勢あり、当表にては情実不分、専ら開拓を主とし議論紛々歎息之限り也と云 ○静岡より来状、廿三日役々出来

廿七日

宮島誠一郎

廿八日 嘉兵衛 小島七郎

杉浦誠⁽⁹⁾来訪 ○北海道十勝⁽⁴⁾之内十

郡、静岡藩江御預ケ開拓方実効可有

(6) 西郷隆盛

(7) 高知藩士

(8) 清水谷公考

(開拓使次官)

(9) 八月二十九日

開拓使権判官となる

旨也

廿九日

小島七郎国許江出立、同志江相談すと云、餞別十両

遣す ○信太歌之助、明日大宮県江出立と云

大久保殿より 岩倉重相公之御辞申越す

静閑院宮様江献金三千両、^(寛)いまた不相納、御操廻

等西京橋本殿之御書状御見せ御内沙汰、即刻浅

野氏江申遣す

左兵衛督殿より呼ニ来る、確堂殿之事并其他説を

被聞度由、并清水家之転末、同家来并他日不都合

而已被致旨答ふ

⁽³⁾^(東)下国藤七郎使、熊谷倉吉

九月朔日

◇青木作次郎 山岡氏・関口氏、小金開拓方

江御用可成旨、北島申聞候由也◇⁽⁴⁾

(1) 橋本実麗 (も) と参与 静寛院宮の伯父)

(2) 吉井信発 (前 吉井藩主) か

(3) 松前藩士

(4) 北島秀朝 (東 京府権大参事)

旧伝習卒
青木作次郎

浅野次郎八、(寛) 静閑院宮様江納金之一条如何

可取計哉相談

小野
佐藤清五郎

二日

◇大久保利通殿江行く、献金三千兩之事并蝦夷地

御預ケ之事等荒増内話、直ニ出邸、浅野氏并

静岡江申遣す◇ 弘郎人ジブスケ子ニ逢ふ、アラビヤ

馬之話す、此事は村井正太郎より兼而同人懇望

と聞けは也 宮島誠一郎より文通、心裡申越す

三日

◇大久保殿より(浅野江即刻申遣ス) 岩倉公御沙汰にて、三千兩之納金、

宮内卿万里小路殿或は宮内大輔江可納旨申来る◇

小曾川実来訪 ○静岡江北地之事遣

本丁四丁目俵次郎方天笠屋江参り、洋書一見

◇会津稻和代村百姓清次・徳右衛門、留守江来ル

(5) デュ・ブスケ
(フランス公使館
通訳官)

(6) 万里小路博房
(7) 当時不在、十
日に烏丸光徳が就任

四ノ宮二郎
外卷人

四ノ宮二郎
加州
古木恒太郎
庄内
岡田斐雄
高木江之一封
頼度旨

四日 岡部丹陵勤番組取扱と成る

◇清次・徳右衛門聞く、会家二西郷頼母と云者あり、昨春忠諫、終二不被聞、後家内之自殺を見、籠城また諫言

す、聞かれず、其弟大和用次郎と云者を引て開城、箱館

に到れりと、其他原田对馬と云者名望あり、西郷と同

意成り、当時家^諸属二附きて会二ありと云、其他は歎願、

領主之為二諸々に訴ふの内話、また我二倚頼す

○本日宮内卿江三千両納上相済む◇

杉山秀太郎納金、万里小路殿御内人不受取、明朝

再持参候様申聞たりと云

五日 納金相納む、万里小路殿御家司昨日不受取を謝ス

星野豊後来訪、宮様御附被仰付之相勤と云

岩国藩佐伯清太郎、近々帰国之旨申聞る

六日

柴田承榮、三河之旧領より家内引移之事暫時

(1) もと会津藩家老

(2) 山田陽次郎 (会津遊撃隊)

(3) 原田種竜 (もと会津藩家老)

(4) 松平容保 (もと会津藩主)

(5) 杉山一成 (もと精鋭隊取締 静岡藩公用人)

(6) 星野成美 (もと禁裏附・勘定奉行 並) か

(7) 静寛院宮

男谷忠次郎妻

高知

毛利恭助

金沢

沢田権兵衛

金沢

沢田権兵衛
山田章蔵
小木恒太郎
河津健次郎
本庄藩也

二ノ宮次郎
千葉塾中二入りし云

肥前

佐野栄寿左衛門

佐土原

木脇良太郎

アラビヤ馬預り

和田倉元会津邸

今兵部省内

箱館義三郎

和田近日開成所
少得業と成る

御猶予被下度、其他云々

七日

豊前郡医佐久間真一弟日下薩蔵

来訪、小子ニ倚頼いたし度旨申聞る

八日 大久保殿江参、確堂殿、星野之事、会村民之事等内話

佐野栄寿左衛門・木脇良太郎、留守江訪ふ

田口俊平妻来る、鉄炮・ランプ到来

忠次郎妻拾両遣す

九日

木脇良太郎 浪士山田二郎究つて迫申聞候二付、

式両遣す 和田栄次郎当時開成所旧塾生
三郎之子分

◇近日攘夷家近郷江屯集之旨、大久保殿江申遣

す、鎮撫之事申越す

河島新之丞外傭人

黒田了介 津田真一郎 北海異見大久保殿江届方

(8) 生徒
(9) 大学校

(10) 佐野常民(佐
賀藩士)

(11) オランダ留学
生 慶応三年没

(12) 男谷忠次郎

(13) 函館大経(小
野為三郎 沼津兵学
校御馬方)

(14) もと新徴組
(15) 高木三郎

頼む 宮島誠一郎 日下薩蔵引越ス

十日

小曾川実子弟入塾之者、駿河江遣し度旨

◇山岡江談、伊丹珪次郎、攘夷家説得として明日出立為致候歟

十一日

杉享⁽¹⁾二より書状到る

富山
林曉雪⁽²⁾
四ノ宮二郎

大久保殿江参、青島幸次郎建白差出、其他種々

内話 ○田口家内江銀錢并炮之礼五十兩遣ス

十二日

林曉雪より来翰、四宮次郎持参

十三日 村井正太郎、アラヒヤ馬之事行違、払郎人江断頼ム

土岐月堂⁽³⁾ 田口家内 手島敬児 加藩^州小木

恒太郎 肥田浜五郎、米国江一封頼む、バッヘル

モーレン之談有之

十四日

(1) 沼津兵学校員
外教授方付 海舟門
下

(2) 林太仲か

(3) 土岐頼旨

清水家別立
之事難被及
御沙汰御書付

御広敷向人減、
残百人計、御手
当一ヶ年二万兩程

確堂殿
静閑院宮様御用
取扱、且府明地
御預、開墾之事
書付、御同人江差上
是御頼頼なるに
因て也

三春藩
三頼鏈次郎
金沢
七尾三之丞
井上徳太郎

明治二年九月十四日、十七日

星野虚舟・川村権七・岡部丹陵来訪

毛利恭助江永持五郎次之事申遣す(6) 元歩兵両

人江金子遣す、手疵不癒困究之旨申聞る二因る(7)

十五日

前川喜六・黒田巡、金沢藩也

渡辺魯輔・土岐月堂・信太歌之助来訪

十六日

猪苗代村庄屋兩人 林暁雪、加州家手ヲ附
くるの話あり

瑞穂屋卯三郎 金沢藩小木恒太郎・

山田章蔵 今治藩下野英勇(7)

薩山本吉蔵・白石小次郎 宮島誠一郎・

小川孫太郎(11)、此程国許より着、三・四日相立帰国、政

事向彼是相談 ○浅野より来翰

十七日

青山小三郎江確堂殿開拓之事頼(12)

林三郎駿府より帰府、監察手記拾余冊戸川殿

(4) 星野千之(もと外国奉行)か

(5) 川村一匡(もと大目付)か

(6) 小林玉二郎・加藤貢・乙骨綱二

(「会計荒増」より)

(7) (10) 大生徒

(11) 小川忠弘(十月米沢藩少参事となる)

(12) 青山貞(東京府権大参事 福井藩士)

ロベルトウヲルス
より一書到来、
同人着之旨

佐土原藩

① 島津久之丞
② 丸岡竹之丞
梅沢太郎
橋口宗儀

③ トーマスワルス江一封

旧久世家老
④ 木村正右衛門
留守居
丹羽真蔵

より届来る ○米国当七月十五・六日出之書状二封

静岡より届く、ヲルス氏来浜二付、悴より記行小冊

差下たす

十八日 宮島誠一郎茨之記借遣す

大久保殿江旧監察手記差出す

佐土原御二男留学之事二付種々御頼、ウヲルス子江

頼可申旨書翰、松田伊助方江認む

十九日 浅草辺行歩

佐土原藩児玉江御二男并御家来米行二付、ウヲルス

氏之引受世話之事頼度旨、松屋伊助江一封出す

④ 毛受洪来訪

⑤ 真龍寺大盈、黒田了介殿江招介之事頼む

廿日 田口家内江、丹羽之事山岡江可参旨、猶又談す

梅沢太郎、ウヲルス留学之事引請、世話可致旨答候由、

猶跡々相頼度段申聞る

(1) 島津忠亮(忠
寛長男 大 schools 生徒)

(2) 大村純雄(島
津忠寛次男 大 schools
生徒)

(3) T・ウォルシ
ユ(ウォルシユ・
ホール商会経営者)

(4) もと参与 福
井藩士

(5) 高知藩士か
老
(6) もと関宿藩家

沼津藤沢より来状、同所御趣意相守、至極無事

と云

廿一日

薩山本吉蔵 高島藩石城小三郎・

諏訪紘三 唐橋從五位同家安藤源五郎

福江藩松尾龍蔵 島津事黒岡帯刀

米沢 畠山潮平・竹俣速水・毛利総八郎・

大滝新十郎

聞く、黒田了介殿剃髪と云

廿二日

林暁雪、国許改革之事二付明日出立と云

佐土原世子初、本日横浜江行、直二米国江渡る二付、ホー

ペス并悴・ウヲルス氏江一封を託す

廿三日

荒井郁之助妻 妻木昨夜帰着之旨申越

(7) 唐橋在綱(大
学校生徒)か

(8) (10) 大
学校生徒

(11) 毛利業広(十
月米沢藩大参事とな
る)の子息

(12) 小林年保(静
岡藩公用掛下役)

(13) 石野基佑(大
学校生徒)

(14) もと軍艦頭、
箱館降伏人 妻はと

み子(松本良順の義
妹)

本庄藩

老人

富山藩

兩人

廿四日

紀州浜口より粕漬式樽差越

浅野・小林・杉浦入来、紅葉為取出候御桐器⁽²⁾

一見

廿五日 朝⁽¹⁾倉藤十郎、本日着

浅野、越⁽²⁾前侯内話之事談し有之

小林平角江千両、三郎預り金之内遣し、慎ミ人開解

之為也 箱館儀三郎アラヒヤ馬之事申聞る、元松浦

原太郎門人、宅江来たりし人也

廿六日 於国江拾両遣す 秋田江御預ケ之卒無心

土屋暢軒より来翰 田口より蘭書九冊取寄

廿七日 勇次郎江式両

明日無紋礼服用、出 営之御達有之

廿八日

◇宝台院御慎以 叡慮御有免之趣御達、

◇本日、昨年来

⁽⁶⁾ 歩卒 饑餓之者江三両遣す

丸龜藩⁽³⁾
小野武次郎⁽¹⁾
北条五位⁽⁴⁾
森寅雄⁽⁵⁾

(1) 静岡藩少参事
監正掛

(2) 松平慶永(大
学別当、待読)

(3) 大学校生徒

(4) 北条氏恭(狭
山藩知事)

(5) 大学校生徒

(6) 福田七之助・
永井勝三郎・菊地鉄
五郎(「会計荒増」
より)

謹慎之向、悉く被免、榎本已下同断と云◇

安藤一作

土州

宮地正夫

真龍寺

大盈

松山忠左衛門從弟

多喜米太郎

高島藩

諏訪紘三

石城小三郎

廿九日

浅野氏今夕出立、予有説といへとも今日之勢昨に異なり、小人之所置皆如斯

大久保殿江為御礼参る、進献之事其他心得

内伺いたし置

川勝駿之輔書画帖帰るより

晦日

山岡鉄太郎、会津家血統之者申出候様被 仰渡と云

十月朔日

鮫島誠造殿来訪、東京府之所置成難き旨(8)

之話有

二日

小林甚六郎、復跡之旨到り静岡岡江可相願旨申来候旨

申聞ル

三日

(7) 榎本武揚(もと海軍副総裁 箱館降伏人)

(8) 鮫島尚信(東京府権参事 鹿兒島藩士)

星野虚舟 黒川伝二郎より手当金札百四拾

両余、林三郎持参

四日

大盈⁽¹⁾・土州吉村又次

五日

関口、東叡山中経界見分済、土堤ニ取掛りたる由也、
亦確堂之御事并最樹院様御霊屋事等談す

小金江開拓二付、藩千或は五百戸引移之事中断

六日

川勝真蔵、近々越前之実家江行き改革之事被頼
候二付、万事相談有之

酒井禄四郎⁽³⁾、此度之御礼御請書持参、関口・川村江委

曲相談す

七日

◇大久保殿江、静岡表にて悦服之情態申述、◇并江家

(1) 真龍寺大盈

(2) 一橋治済(十
一代將軍徳川家斉の
実父)

(3) 酒井忠愬(徳
川家達家令)

系図⁽⁴⁾ 広沢殿江内々返却之事頼ミ遣す

山岡氏・酒井祿四郎、本日確堂殿御礼済之旨也、静岡江

書状差出

八日 ○杉浦八郎五郎、明日出立ニ付、巻物・写真届方頼遣す

岡部丹陵

岩倉殿より御直書、帰藩候ハ、一応可申上旨、且兩三日

会集御話可有之旨也

九日

○

赤木真澄、雲州侯国許之改革、禄高五百・三百・八拾石と

三等ニ平均し、万事先無異ニ施行行届けり、因て

礼として来ると云

金沢公用人岩田信輔、国許兎角空議、内談いたし

度旨申述 卯三郎江写真之料七兩貳分、林江⁽⁸⁾介シ

小林江頼ミ届遣す 山岡江写真十二葉届く

杉浦八郎五郎、明日出立、暇乞ニ来る、駿河より之手紙

持参

(4) 広沢真臣(参議 山口藩士)

(5) この一文が九日条に入ることを示すものか

(6) 静岡藩権少参事、政事庁掛

(7) 岩倉具視(大納言)

(8) 林三郎(惟純)

延岡

原小太郎

鹿兒島

河島新之丞

加州

小木恒太郎

四ノ宮二郎

土藩

小山茂平太

米

大滝新十郎

^(孫清代)
猪名代人

徳右衛門

十日 竹内半介^(孫)、紀州にて減祿、小給之者江及と云

九日 小林長次郎、人物宜敷、近々可用立者

十一日

千本弥三郎⁽¹⁾・堤五市郎⁽²⁾ 山岡先生

土州之書生兩人

十二日 織田より来翰 兼親父江三兩

増上寺役僧西念、小林甚六郎江引合せ

真一郎、駿河より之来翰持参、品々談有之

近日雲州之公用人同藩にて殺害風聞、且⁽³⁾

小野清一郎暗殺せられたりと聞、高松にても家⁽⁴⁾

老暗殺之事ありと聞く

十三日

堤五市郎・酒井礫四郎・堀小四郎来訪⁽⁵⁾

桜御殿御出立之事相談⁽⁶⁾

宮地正夫

十四日 今町便、御中老之事并預倉之事申遣す

(1) 千本久信(福井藩士)

(2) 堤正誼(同右)

(3) 増田健蔵(九月二十四日暗殺)

(4) 松崎渋谷衛門(九月八日暗殺)

(5) 堀利孟(利照の子 浜松奉行支配割付、十勝詰開業方頭)

(6) 徳川慶喜夫人美賀子

酒井禄四郎より使、明日出立之旨宅状頼ミ

十五日

岡崎藤左衛門 杉浦誠、廿五・六日函館江出

立之暇乞 宮島誠一郎 加沢藩岩田生(マ)

川村権七、駿河より来翰、相原・中条之事申越(8)

小島七郎、会津より帰り来る、大悦此度之礼申聞

十六日 川村権七、天璋院様薩知藩事江御逢之事申聞(9)

石川香雲院妻、同人出牢之頼申聞る

肥田浜五郎

十七日

中条・相原説不合、相原髪を切て職を辞す、説諭を一翁より

乞ふを以て書を送くる

山岡鉄舟、成田新十郎桜御殿御出立之事二付出府、(10)

種々相談、当廿一日頃御出立之積申上候旨、且金千両

女中御手当操替之事頼む、委細山岡江談シ黒川

(7) 岩田信輔(金沢藩士)

(8) 相原安次郎(静岡藩開業方、郡制掛筆頭)

(9) 島津忠義

(10) 徳川慶喜付家扶

立花紀伊⁽¹⁾
同藩
安藤多記^{(2)(東)}

金沢
岩田信蔵^(補カ)
外 耆人

四ノ宮二郎
山口藩⁽⁷⁾
平岡健

肥後

江申遣す

十八日

十九日 駿河より来翰

南部彦蔵、近々帰国之旨申聞⁽³⁾

松林堂掛物出来、持参

公用方にて関東書二冊、軍務官江出す

廿日

島津從四位使者時任清左衛門、先年肥後七左衛門⁽⁴⁾

已下世話之礼、反物到来

廿一日 妻木より使⁽⁶⁾

津和野藩井川精一、福江藩大坪文一郎・入江恒三郎⁽⁸⁾⁽⁹⁾

紙上寿人⁽¹⁰⁾

時任より使、南部弥八郎江借置候五十両返金⁽¹¹⁾

島津帯刀、心裡身上之話あり

廿二日

(1) 立花親信(柳川藩士 大学校生徒)
(2) 柳川藩士 大学校生徒
(3) 高知藩士

(4) 島津忠義
(5) 鹿兒島藩士
海舟の食客

(6) 妻木務(静岡藩少参事、公儀人)
(7) 大学校生徒
(8) 田口資(大学校生徒)の変名
(9) 入江惟政(大学校生徒)
(10) 太田寿人(大学校生徒)の変名
(11) 鹿兒島藩士
海舟の食客

森安之允
古庄幾太郎

高見清三郎
薩人

本日 皇居御着

立花紀伊
皇学之事、其
他説弁

清水人三人

十勝よりホルイヅミ
之間にて運上

但アイノ居住

多シと云

昆布凡二万石

塩引三千石

昆布五百石にて

大凡六百兩

塩引五百石にて

六百兩位と云

鹿皮凡式千枚

肥後人來訪、国許兎角因循也と云

廿三日

清水家朝比奈一・長野忠一・鈴木源三面会断る

廿四日

肥田浜五郎、能勢某事頼ミ、バツヘルモールン一万五千御下ケにて

差出方可然と、木工局江内話ありと云

山岡鉄太郎、日光之事、小金之事話有之

廿五日 ○遠州旧知者⁽¹²⁾税御渡、金七千兩計、米四千七百石計^{五万兩}

◇小林甚六郎、上野御靈屋之事、日光山 天裁二可成

旨、戸田和州之内話有之趣也、此事昨年已来

我か内懇願する所、終二今日此事を聞く、泉下

二奉対 神靈二面目を不失といふへし

堀清之丞・東善八郎箱館大主典、当十五日クシ

ンコタンより帰れり、彼地之形勢を聞く、魯人益

建家、民を移す之策也と

(12) 古庄一雄(大
学校生徒)

(13) 堀基(開拓使
大主典、鹿兒島藩士
海舟門下)

(14) 東長教

大 学 校 生

- ① 山本権兵衛
- ② 草場佐五郎
- 村上杏助
- ③ 末松立造
- ④ 河津健十郎
- ⑤ 安達栄三
- ⑥ 七尾三之丞

廿六日 佐竹藩士航海之事学ひ度旨にて来訪

織田泉之・宮田文吉、駿河より着、政庁諸勤

定諸用御申立之草稿持参、前様より御短冊、

金子百両被下る、小子愚存を述ふ

海野家来、宅より衣服三ツ届越候由にて為持遣す

廿七日

堤五市郎、越前家より金子500合力、同人持参

薩摩川村与十郎、昨は東山道出張、宇都宮・

熊谷、其他古屋佐左之転末、奥白河口戦争、

会津城攻撃転末等話

廿八日

⑩ 高見清三郎 信太歌之助、東京府或は弾正局江紹

介頼度旨申聞

廿九日

清水家朝比奈一・長野忠一、清水御立被下度旨之歎願

山口藩
平岡健
柳川同

(1) 草間三五郎

(松代藩士)

(2) 香春藩士

(3) 河津健三郎

(本庄藩士) か

(4) 安達敬直(富

山藩士)

(5) 金沢藩士

(6) 静岡藩権少参

事、會計掛

(7) 徳川慶喜

(8) 川村純義(鹿

児島藩士)

(9) 古屋佐久左衛

門(衝鋒隊長 箱館

戦争で戦死)

(10) 鹿児島藩士

十一月朔日

立花紀伊⁽¹⁾
笠間益三⁽²⁾
吉田文四郎⁽³⁾
井手復次郎⁽⁴⁾
薩
山本権兵衛⁽⁵⁾
和田次郎左衛門⁽⁶⁾

関口塾
馬場藤四郎

本日
会津
陸奥之内三万石
賜旨也

荒井之家内難渋申聞候二付、五拾兩助力す
土州橋詰明平

小田均一郎、昨着府之趣にて来る、国許改革都合宜敷、藩
知事より礼申通す、中国・西国筋紛々、芸は中川様⁽¹⁴⁾
之説二因る者多く、郡封建之論、或は幕復等之説也と

二日

中尾捨二国元より帰府二付来訪 ○林三郎金子之話⁽¹⁵⁾
あり、承知ス
中島作太郎元兵庫吏、今は伊達五郎江同居と云⁽¹⁶⁾

三日

織田泉之、品々相談、室賀之事一翁江一封⁽¹⁷⁾
長谷川得蔵妻、難渋申聞る二付、金子合力いたし遣す

四日

川村権七、朝倉之事、織田江談可然と云

五日

(11) 笠間讓 (柳川藩士・大 schools 生徒)
(12) 十時文四郎 (柳川藩士・大 schools 生徒)

(13) 大 schools 校生徒

(14) 中川宮朝彦親王

(15) 中尾捨吉 (高知藩士)

(16) 伊達宗興

(17) 室賀正容 (竹堂 明治三年静岡藩家達付家令)

薩侯御兄弟御来訪、本日天璋院様江御出

六日

柳原殿御来訪、此御方は昨年東海道先鋒御惣

督、当時外務御出仕と伺ふ、勝木生御紹介申上

香春石井省一郎・建野郷三

南部弥八郎・肥後七左衛門

聞く、薩州家内田仲之助より、天璋院様万事御手

輕に無之てはと申事被申入候由也、是は大久保殿江

兼而御内話いたし置候事也、厚意可謝

七日

久保田藩池田江紹介認直す 薩藩五人

山岡氏

長州⁽⁸⁾ 富田貞二郎、人物沈着、学問出来と見受る

八日 一翁江薩書生之事申遣ス、但明日手紙届方之積

黒川伝江頼、葛籠老ツ巻物一包、駿河江届方頼遣ス一兩遣ス

小田均一郎・奥田周蔵・吉岡俊五郎来訪

種田清左衛門⁽¹⁾
最上孫左衛門⁽²⁾

兩人一翁方
江寄宿之事
申聞ル

鹿兒島

安田仲左衛門⁽⁶⁾

吉利吉之進⁽⁷⁾

奥良之丞

金沢

岩田⁽⁹⁾

篠原佐二右衛門

薩書生

四人

(1) 種田誠一(鹿兒島藩士)

(2) 最上五郎(同右)

(3) 柳原前光(外務省出仕)

(4) もと民部省出仕

(5) 内田政風(鹿兒島藩参政)

(6) (7) 大生徒

(8) 山口藩士

(9) 岩田信輔(金沢藩公用人)

(10) 黒川伝二郎

薩州人
四人

浅見真藏
海軍局江御召
故に來ルと云

平岡健
大館玄記
御召ニ付來ルと云

田安・一橋家々來
之御所置可承旨、
大久保殿遣し候趣
了介殿内話
藤母五両遣す
薩
大寺弥七

浅見真藏、朝廷より御召ニ付出府來訪

九日

山岡氏、確堂殿御願昨日御聞濟、御同人より御手翰

○信太之事、鮫島殿江一封、同人使江渡す

荻野柳次郎 林三郎 鳴鷺帰府ニ付使⁽¹⁾

十日 庄内岡田斐雄

織田泉之品々相談 黒田了介、朝臣之者調之
事類ニ申聞ル

○福田半藏、加州より帰府ニ付來訪

十一日

黒岡帶刀 矢島金平 高松昇

◇柳原様より御直書、朝鮮之事御出問、書類御借り

被成度旨也◇

(黒田了介、朝臣減祿之見込草稿
渡す、是は大久保殿頼也)

星野虚舟

十二日 紀州津田又太郎より來翰、一翁より届越す⁽¹²⁾

富田貞二郎、津田真江紹介

(1) 福田敬業(半
藏 金沢藩公用人)

(12) 津田出(和歌
山藩権大参事)

河畑退三^①
土

原四郎

岩田平作、黒田江海軍所出仕之事頼遣ス

十三日 林曉雪より使

宮島誠一郎 毛利恭助

十四日 駿河より来翰

笠鳳一郎 有馬幹太郎 清水家之者式人

勇手下合力頼者^②兩人、三両差遣す

十五日

佐久間鑞五、田安家江悴被召抱へく旨、其身は御雇之

内話あり 岩田平作

十六日

岩波殿内大藤源五郎

中根雪江・毛受洪、中根氏 朝廷御賞典之御礼

出府之旨

十七日 一条養母并娘 相原氏より来状

榎本母江拾両、慎人江卷式両遣す^⑦

(1) 川畑篤雄 (大
学校生徒)

(2) 長田五郎・土
橋半三郎 (「会計荒
増」より)

(3) 佐久間鑞五郎
(信義 もと静岡藩
御用人)

(4) 佐久間信英
(信義の養子 向山
黄村の弟 沼津兵学
校資業生)

(5) 福井藩士

(6) 相原安次郎

(7) 榎本こと (榎
本武揚の母)

(8) 岩本芝吉・芦
田治左衛門・神谷熊
二郎 (「会計荒増」
より)

唐橋殿
山口藩・柳川藩
薩州其他
数人来訪

富田貞次郎
建野郷三
石井省三郎

柳原殿
平岡健

岡崎藩
青山昇三郎
長岡
三島億二郎
中島作二郎

十八日 相原氏之返書宅状、松平勘太郎江一封差出

越老侯江火燈相呈す、中根雪江江使差出す

大久保殿江参、帰府之事、且 岩倉様御用之儀

伺呉候様御頼申上候 黒田氏・山口藩士江面会

十九日

土州橋詰明平、同藩々内炮術之為教授借受致

度、毛利氏之口上申聞る

肥田浜五郎、能勢氏帰藩願書二通持参

廿日

岩倉殿様より御直書、夕刻参館、小臣御挙用之

御内命、拙才不任用、一書生是分と申事を述

廿一日

大久保殿江行く、留守二付薩州江過日之挨拶として

参館、川村与十郎・村田新(10)・寺島陶蔵江面会、

黒田子江頼ミ、昨夜之転末、且帰駿之事大久保

(9) 毛利恭助

(10) 村田新八

(11) 寺島宗則(外

務大輔 鹿児島藩

士)

(12) 長岡藩大参事

殿江通話相頼む

土

田村久太郎
小山茂平太

廿二日 肥田より文通、能勢之事頼越す

被仰付候は

大久保殿江參ル、帰駿之事并御役御免之事等議

論、黒田氏も同局江被命へく、強而勉励之事御談

有之、帰駿之事は明朝迄ニ御沙汰御頼申置◇

宮田文吉、廿四日帰駿ニ付来訪、当節之事内話、

一翁子江一封頼む

夜に入、召あり、明廿三日十字出頭可致旨也

廿三日 海軍局其他之小事を記し、黒田氏と共に岩相江呈ス

十時登 営、兵部大丞被 仰付、即岩倉殿江

兵部は不案内、且乍恐当今之兵之如く雜乱無基、

乍微力小臣か學術之如き、其中ニ遭迎ニ堪可申哉、

前夜海軍之執可申御内命あり、海軍ニ候ハ、少しく驚

力を可尽といへとも、突然兵部被 仰付候如きは敢而

辞すと云、頗る僭驕漫ニ失すといへとも、其官ニ当て

(1) 岩倉具視(二十三日兵部省御用掛となる)

お花江拾両

尾

鬼頭佐太郎

金

加藤恒三郎

鈴木純一

前橋

香春

八木勇次

郷三

岩田信輔

外屯人

立花紀伊

吉田文四郎

外一人

薩州三人

舞鶴藩士某

は彼我之差別を成さむ、おもふ所を述ふ而已

廿四日 柳原殿より今夕可参旨、然るニ頭痛ニ付御断申上る

佐野栄寿左衛門来訪 織田殿、柏原学而・石川之事

頼む

廿五日

清水家鈴木・朝比奈 富田貞次郎

廿六日 三両御幸之母、十五両お幸江、駿州江出立ニ付遣ス

柳原殿御返訪 内田之妻一夜泊る

廿七日 米国十月出之書翰駿河より来る

万里小路殿御返訪、御壮年ながら御伶俐之御性也

佐藤与之助、大坂より東下、民部省出仕被 仰付

米国より来状、海軍学校江入り度旨申越

廿八日 毛利恭助より使、国産紙到来

肥田浜五郎 結城無二三、拾両遣す

大久保殿江帰駿之事申遣す、留守、返詞無之

(2) 静岡病院二等
医師

(3) (5) 大学校
生徒

(6) 八木勇之助
(大学校生徒) か

(7) 金沢藩公用人

(8) 万里小路通房
(博房の子息 大学
校生徒 十一月イギ
リスへ留学)

(9) 佐藤政養(民
部省出仕 海舟門
下)

(10) もと新選組隊
士

小林長次郎
本借遣ス

清水家兩人

廿九日 柏原学而 毛利恭助江一封認遣す、石川之事聞合之為也

戸田一夢・小花和隱居来訪、一夢は撲実可用

晦日

宅状川村江頼む 大久保殿より過日之返書、帰駿願

近日中伺定可申越旨也

復国屋親父聞く、薬師寺筑前輩饑餓甚敷、伊井家より(并伊)

扶助を乞ふへしと、また御家人小給之輩道路ニ倒る者ありと、

親父云、誠如斯之士多きは実二見不忍、今日之形勢ニ至る

も宜也と歎話す

十二月朔日 勇次郎暇遣ス、金五両恵む

梯田杏庵 元海軍附医・肥後人、柴誠一之手紙持参、誠一

親類江預ケ御聞濟、酒井家江引取云、船中之サーイ其他御払

代四百計残有之、其所置を如何可致哉と、答て饑餓之者江兩

扶持可差遣と云々

宮島誠一郎、綿糸織到来 津田真一郎

(1) 薬師寺元真
(もと側衆)

(2) 鶴岡藩士

(3) 米沢藩士

(4) 佐久間象山の
子息

(2) 岡田斐雄
(3) 大滝新十郎
(3) 佐藤与之助
(3) 佐久間恪次郎
薩州家に
世話二相成居
と云

十時一郎⁽⁵⁾
立花紀伊⁽⁶⁾
大村務⁽⁷⁾
安場一平殿⁽⁸⁾
富田貞次郎

宮地正夫⁽⁹⁾

三兩遣ス
阿部定之丞⁽¹⁰⁾

卯木策一郎、柳原殿御書翰持参

昌平校書生
兩人

二日

黒岡帯刀、杉亨二之取調人別帳借す^(マ)

柳原殿江本一冊、悴之事相願上る 黒田氏江

一封差出す 織田殿十日頃帰駿之積と云

三日 黒田より返書来る

猪苗代清治 ○河田兵部大丞・柏原学而⁽¹⁰⁾

○薫正寮養道、南部之人、可談人物也

○佐久間恪次郎・薩人兩人、入塾之事頼ミ申聞る

○柳原殿より御使卯木、杉浦金已下之事御聞合

四日

加州岩田信輔、明日国元江出立ニ付暇乞、同藩青山

興三・河崎曾平来訪

五日 一翁より来状、浜松打潰之事、甲信乞人追払駿遠江寄らせす

林暁雪より使 宮島誠一郎より手紙、毛利総八郎

入塾之事頼ミ越す

(5) 柳川藩士

(8) 安場保和(胆沢県大参事 熊本藩士)か

(9) 高知藩士

(10) 河田景与(兵部大丞 鳥取藩士)

(11) 沼間守一(一厄介「会計荒増」より)

恪次郎、同人身分之事、田中清之進江聞合頼手紙認遣ス

六日

朝倉勘四郎聞く、此頃朝臣本領安堵之向減石

被 仰出と、亦田安家にても禄高改革之事ありと云

三条家藤井弘助・兵頭氏来訪、軍備且形勢を

話す 佐野栄寿左衛門、明日横浜江行き、また国許江

帰ると、誠(カ)之船来るニよると云 佐藤与之助

七日

◇大久保殿江御暇願書差出◇

金沢議員篠原来訪 外務省より米国留学

之者御手当受取勉強之旨御達写、関口より来る

弘郎人治部介来訪

八日

有馬藤太(7)、恪次郎身分之事二付、田中氏之返

答申聞ける、薩家より真田江よろしく談吳可申旨也

林三郎、静岡江之書状頼ミ

大久保殿より返書、御暇願表向弁官江可差出旨

富田貞次郎
橋詰明平

忠次郎妻、
悴病死二付、
無心申聞ル、
三兩遣す

吉兵衛

本間栄七郎
岡本健三郎
同道いたし度
旨申聞置

川島新之丞
外国行之内話

(1) 鹿兒島藩士

(2) もと静岡藩御用人

(3) 高知藩士

(4) 男谷忠次郎

(5) 民部権少丞、大蔵権少丞 高知藩士

(6) チュ・ブスケ

(7) 鹿兒島藩士

弁官附
喜多村鉄太郎

御暇願以公用人
弁官江差出

下国東一郎

二付、公用人江頼、書状并書付三郎江明日届方

頼む

九日

織田殿、日光之事、河津⁽⁸⁾・小股可然哉之旨、戸田之話之由、

如何と問合、小子関口可然と答ふ

小林長次郎 卯木策一郎 小鹿海軍校入之事

願書可差出旨、柳原殿御内沙汰

十日 佐久間恪次郎

岩倉様江油画三葉差出ス 境務 岩崎豊

酒井閑亭・山岡鉄太郎静岡着^(マ)二付、来訪

戸田一夢、金弗四拾兩預り置 下国⁽¹⁰⁾より来状

十一日

下国東一郎 平井喜和馬 黒岡帯刀 平岡健

小田均一郎来訪 黒田了介近々帰国と云

聞く、宇瀬生、弘郎察と之中六ヶ敷、稍く兵を結ハむと

(8) 河津祐邦(もと若年寄)

(9) 小俣景徳(もと奈良奉行)

(10) 下国東七郎(松前藩士)

する徴あり、英弘輩若此挙あらは魯国乗隙

を恐るゝ意あり、魯人横浜に在り、此地に兵を増、又軍

艦を廻すと

十二日

戸田一夢 山岡鉄太郎

十三日 相原・織田江出状頼ミ

◇⁽²⁾小林甚六郎・岡部丹陵来訪、日光山江五千石、二代様

迄神位被 送候旨、戸田大和内話之旨、小拙云、我か申立

る所今日迄也、行先は戸田氏江御周旋可然と云◇

小田均一郎、明日横濱江行く⁽⁴⁾旨二付来訪

十四日 戸川平太、着之旨申越す

十時⁽¹⁾十郎・大村務来訪、十八日二出船、帰国之旨也

柳川之書生一兩人、静岡学校江入候事頼申聞る

○岩倉様より御使、出立前明後十六日朝之内参

館可致旨

⁽¹⁾伊勢喜死去之
知らせ有之
金沢藩老人
前橋藩三人

御用有之候間、明十四日
参 朝之御達
公用人江名代頼ミ
遣す

御暇願御聞濟
東条悦三郎
持参

(1) 竹口信義(十月二十二日死去)

(2) 静岡藩権少参事、監正掛

(3) 徳川秀忠

(4) 静岡藩公用掛
公用方中役

米国より来状、
学費之礼
状

十五日

酒井閑亭・山岡鉄太郎来ル 雲藩赤木

真澄帰国暇乞 林三郎明日出立暇乞

十六日

◇岩倉殿江参館、来春早々帰東可致旨也

大久保殿江参る、十九日薩州江船便、御帰藩

と云 竹内半介 ○宮島誠一郎・毛利総八郎入塾

島津帯刀 佐久間恪次郎

十七日 佐藤与之助

岩倉様御子息御兩人留学之事御出問⁽⁵⁾

山岡氏 小林甚六郎 佐野栄寿左衛門

十八日

Cセルシース 顕温器
十二月廿一日
小田原 風
C十一度 B七十三度
廿二日

十九日

柳川藩由井某⁽⁶⁾雪下
立花出雲来訪 出邸

(5) 岩倉具定と具
経(明治三年一月ア
メリカへ留学)

(6) 由布雪下(も
と柳川藩家老)

同畑
<五度 >七十一度
権現坂
<四度 >六十九度六^八
甘沢
< > 六十九度六
元関所跡 微雪
四度 六十八度
廿三日 静岡
七度強 七十五度

廿日 出立 藤沢植松屋一泊 廿一日 湯本 廿二日 沼津

杉本^(カ)厩屋来ル 廿三日 着

廿四日 帰宅之届、^(イ)牧野田三江渡す

廿五日

藤沢長太郎・男谷勝三郎^(ニ)・松平勘太郎^(三)・矢田堀^(四)

景蔵来訪、藤沢江土州江借遣す者之事談す

松平江小林より被頼候ヶ条書渡す

廿六日

浅野次郎八・男谷勝三郎・林三郎・大君^(大儀見)元一郎・松平甚兵衛・

酒井閑亭・梅沢^(五)孫太郎来訪

浅野江藩士被除へく旨申す、此事昨已来再三申立たりしに

いまた聞かれず、我微意あれとも知人無し

廿七日

織田氏・河田氏来訪

廿八日

^(六)知事殿江退藩之書付、溝口江渡す

(1) 静岡藩権少参事、監正掛

(2) 静岡藩権少参事、郡制掛

(3) 松平信敏(静岡藩少参事、政事庁掛)

(4) 矢田堀鴻(明治三年静岡藩権少参事、軍事掛となる)

(5) 梅沢守義(徳川慶喜付家令)

(6) 徳川家達

大久保一翁・溝口八十郎、知事殿より熊野炭百俵

被下

廿九日

松平勘太郎・立田政太郎来訪

晦日

途中大草⁽⁸⁾・中条・相原氏に逢ふ、室賀氏来訪

明治三庚午正月元日

室賀竹堂

二日

◇浅野・織田両氏、藩籍脱候事御決答被下度旨申之

清水家名相統之者何人可宜敷之相談、答、水戸家⁽⁹⁾之御方

并確堂殿及ヒ御子息、御三名之内御申上、

朝裁可然と云◇ ○片山椿助⁽¹¹⁾

三日

◇溝口八十郎、知事殿御使、此程暇之事、何分尤二候へ

(7) 立田政吉郎
(静岡藩開業方)

(8) 大草高重(多喜次郎 静岡藩開墾掛頭並)

(9) 徳川昭武(水戸藩知事 もと清水家当主)

(10) 朝倉勘四郎
(11) 片山雄八郎
(もと軍艦頭取 静岡藩軍事掛軍事俗務方頭取)

共、今暫らく勉励御頼之旨也、因而承知、無是非

次第を申す

四日

室賀竹堂 杉田玄端⁽¹⁾

五日

大久保一翁 柏原学而 梅沢孫太郎 牧野田三

六日

夜越藩^(ママ) 長海来訪

戸塚文海・名倉弥五郎⁽³⁾

七日

酒井閑亭 林三郎 朝倉藤十郎 河野九郎⁽⁴⁾

八日

山岡鉄太郎 水沢主水 薩生兩人

九日

溝口御使、俸金持参、猶御手許金之事云々

一翁明日上京二付、餞別遣す 赤松静衛

岩倉殿^江金
銀員数之手扣、
柳原殿^江象胥
紀聞・韓地図
説、朝倉^江附シ
差出

(1) 沼津病院医師
頭取

(2) 静岡病院病院
頭並

(3) 静岡病院三等

医師

(4) 静岡藩権大参

事、會計掛

蓮レ兼院病
死

兼蓮院
葬送

十日 門屋江步行

平岡四郎 留守江織田泉之

十一日 林三郎、会津国許之者兩人・百姓一人、小子江
歎願之事頼として、一昨着駿、
面会いたし呉候様申聞る
山岡・男谷

十二日

織田泉之 林三郎・会人式人、海江田江一封認遣ス

清次・田中左内・上田典次

十三日

藤沢長太郎 会津人上田典次

十四日 介左衛門

上田・左内・猪苗代村清次、本日帰京二付暇乞

浅野氏、沼津之事相談 小田切鋼一郎⁽⁶⁾

十五日

小田切鋼一郎、碑認来る 助左衛門、惣左衛門譲り候地

所之事頼む

(5) 海江田信義
(弾正大忠 鹿兒島藩士)

(6) 静岡学問所三等教授

(7) 白鳥惣左衛門
(安倍郡門屋村名主)

十六日

白石石助⁽¹⁾ 村上俊五郎⁽²⁾

十七日

十八日 松平勘太郎

甚太郎^(補)東府江
行く二付、啓殿江
算書一、於元江十兩
遺す

◇河野左門、清水家相続、確堂殿は老衰二付、明丸・水戸⁽⁴⁾

啓三郎殿兩人之内可申上旨、御内沙汰◇ ○箱館表之勤慎^(マ)

人御引渡相成候二付、御預ケ地所にて可渡哉否、同断

堺県准小参事矢島源介

介左衛門、惣左衛門同人地所讓可申、兎も角も一覽之事也

十九日

廿日

松平勘太郎、増扶持之事云々 山岡氏、白石沼津之事取扱⁽⁶⁾

方困却之相談、中条江可任と云

廿一日

廿二日

(1) 白戸隆盛(沼津勤番組之頭)

(2) 村上政忠(遠州城東郡佐倉村で開墾に従事 妻は海舟の妹順子)

(3) 河野九郎(静岡藩権大参事、会計掛)

(4) 松平康民(齊民五男)

(5) 徳川篤守(常三郎 慶篤二男のち清水徳川家当主)

(6) 白戸石介(隆盛)

石川武雄、元板倉藩當時勤番組 前田五門⁽⁷⁾
慶喜様より御菓子被下置

廿三日

彦介預り之分

拾七両

佐藤江届

桜井庄兵衛⁽⁸⁾ 田村弘蔵⁽⁹⁾ 佐々倉桐太郎⁽¹⁰⁾

勘太郎子明日出立二付、算書并彦助江返金頼

廿四日

廿五日

慶喜様江参上

廿六日

浅野氏、確堂殿御子清水家相統申上之儀、御同

人より御断有之と云◇

廿七日

知事殿より御菓子

小林長次郎、西京江詰候趣ニ而来る 赤松

廿八日 ○

廿九日

(7) 田中勤番組之頭並

(8) 桜井秀雄(赤坂勤番組之頭)

(9) 浜松勤番組之頭並

(10) 静岡藩権兼少参事、水利路程掛

二月朔日

中条金之助・久保英太郎⁽¹⁾、彰義隊之事談ス

二日

米国より来翰
正月十五日出
絹地遣へく旨

⁽²⁾志
清水三九郎

三日

⁽³⁾
佐土原世子、御家
臣耆人同居之旨
申越

⁽⁴⁾
江連真三郎 林三郎

四日

長州
馬屋
富田書状持参

薩書生兩人 一翁子昨帰着之旨

山岡 赤松 中島理八 滝村小太郎

五日

溝口八十郎 林三郎
津田真一郎 ○溝口より中条江渡す、五百両

来ル、受取置

六日

大久保一翁

七日

彰義隊連作被申聞候旨、古田新十郎作者也と
紺屋町江参上、室賀江行く、山岡同道

八日

(1) 久保勝喜(もと精銳隊頭取 静岡藩開墾掛開墾方頭取)

(2) 姫路藩士

(3) 島津(町田)啓次郎

(4) 江連堯則(静岡学問所付属小学校頭取)

(5) 徳川慶喜の住居

奥田瓊洲

九日

十日 森寅雄⁽⁶⁾、通行掛ケ書通

黒川彦七郎

十一日

東府江^江函算書
等届方、理八江
頼む

介左衛門、惣左衛門地所礼として式百両も遣候ハ、よろし

かるへしと云 ○水沢主水

十二日

十三日

河野九郎、明後日出立之旨、黒川伝次郎江金箱之鍵頼

十四日

酒井閑亭 津田真一郎

十五日 梅沢氏、慶喜様御号附可申上旨二付、取調上ル

和歌山上野山楠之丞・瀬藤留右衛門、浜口儀兵衛之使立

寄、聞く、紀州も昨年は大不作、十年平均して

(6) 狭山藩士
大
学校生徒

五分之出来と云

十六日

津田真一郎、諸家江御預ケ之者不残御免、引渡之旨

十七日

戸川平太聞く、東京無事也と

十八日

酒井幸五郎

十九日

門屋江行 林三郎、明後日出立之旨申置

廿日

林三郎 山岡氏、明日出立之旨

廿一日 松花墨流筆者、当地江在住之事、甚太⁽¹⁾より頼む

甚太郎、相原江梅ヶ崎御林代木^(後力)之事申遣す

盛岡藩菊地武四郎 駒井竹所⁽²⁾ 吉川東一⁽³⁾

廿二日

(1) 出島竹斎

(2) 駒井朝温 (もと海軍奉行並)

(3) 吉川東一郎 (庵原郡山原村名主)

廿三日

溝口、斎藤栄助転役之事、柴誠一所置之事相談

知事殿、学校差出され可然旨申之
之入用一萬金

牧野田三 林紀⁽⁴⁾

廿四日

長藩馬屋某 薩生最上・種田兩人即出立、東

京江行くと云

廿五日

惣左衛門、村内地所譲受談済

越賀範三郎、帰国ニ付立寄 新見

廿六日

赤松静兵衛 片山椿助 本日碑銘蓮永寺江建

廿七日

廿八日

門屋村地所式反八畝十二分^(ママ)、譲受代金百六十五兩、

(4) 林研海(静岡病院病院頭)

(5) 最上五郎

(6) 種子田誠一

惣左衛門江渡す

廿九日

溝口八十郎、篠崎某之事、学問所は如何と云

晦日

織田泉之、屋敷地割渡之事相談

三月朔日

介左衛門

二日

三日

種田・最上東京より今朝帰れりと、長州之国内、政府と奇

兵隊との戦あり、政府勝利ヲ得当正月十二日頃

四日

伴鉄太郎⁽¹⁾ 飯塚廉作⁽²⁾

五日

白戸砂⁽³⁾ 片山椿助

飯塚江康熙字
典・春秋集解
借遣す

(1) 沼津兵学校一等教授方

(2) 掛川勤番組一等勤番、明治三年静岡藩掛川小学校教授となる

(3) 白戸隆盛

久世⁽³⁾江篠崎
之事申遣

六日

惣左衛門江財^(村)木代廿五兩外拾八兩渡す、介左衛門江萱

之代六兩同断 津田真一郎

柳原殿より御直書到来

七日

新見幾三郎

八日

砂永武三郎 薩生兩人、川村与十郎并柳原

殿江書翰頼み

九日

兼・於やう来る

肥前渡辺磊三郎来訪

十日

元彰義隊某 長州之書生

十一日

片山椿助

去ル三日、東京公用人江小拙出府延引二付、早々出

か
(4) 久世平九郎
(静岡勤番組之頭)

京可致旨御達有之と云

十二日

兼親父生活成難き旨二付、三十兩遣す

十三日

藤沢より使

十四日

松平勘太郎一昨日帰駿之旨使

十五日

河野九郎より来状、去ル十日再度小拙出府可致旨、大政

官より公用人江御達と云

十六日

柳原殿江一書拝呈

松平勘太郎、津田真一郎、過日溝口氏江談候知事

殿より学校江年々壹万兩被差出候事被達と云

十七日

新見史雄⁽¹⁾ 白野幸作⁽²⁾_(耕)

十八日

(1) もと横須賀添奉行

(2) 白野夏雲(静岡藩十勝詰開業方御用取扱)

米国より来翰、正月十一日附^(千八百七十七年)二月十一日云紙幣追々引替二付紙幣高価二相成其功追々下落と云

白野幸作 平野幾九郎 能勢益堂

十九日

廿日

松平勘太郎、高足丸如何之伝言 山高慎八郎⁽³⁾

溝口江 知事殿より支配地御巡見、養老孤独之者江被下物、且

藩士娘共手跡縫針教育之事申遣す

廿一日

薩藩兩人

廿二日 兩人頻り二懇願す 溝口八十郎、御巡見之事御決と云

会藩兩人聞く、大久保殿去ル十三日御帰府と云覆国主人之事云

廿三日

御母様御不例、名倉来ル⁽⁴⁾

廿四日 戸塚文海

藤沢江、学校規則厳密は悪敷、寛成る可然と云事并二

千両計りは取除ケ置、別ニ御用途可有と申遣す

会

田中左内
樋口源介

(3) 山高信離(静岡藩少参事、監正掛)

(4) 勝信子(海舟の母)

廿五日 御母様御病死届差出

東京海江田より文通 ○山岡氏、大久保殿江面会、小拙

兎も角も出京所願可取計旨申越 ○林三郎より文通

寺田助之進、海江田之文通持参

○東京江今朝変事申遣書状、明日差立方、

富永江頼む⁽²⁾ ○織田・大久保より弔使

廿六日

津田真一郎 酒井閑亭より使 男谷使

廿七日

松平勘太郎 藤沢より吊使

廿八日

中条金之助 柏原学而

廿九日

大久保一翁 藤沢長太郎 桜井貞蔵⁽³⁾ 溝口八十郎 戸

川平太 知事様より新茶被下る

石川香雲御免

(1) 寺田平之進
(弘 鹿兒島藩士)

(2) 富永雄造(静岡藩権大参事、刑法掛)

(3) 静岡藩航運方
俗事重立取扱

晦日

浅野 服部氏 室賀より問尋

四月朔日

富永雄造、河野より来状、出府可申遣、右二より可取扱旨

二日

寺田・栗原善八・石川渡来訪 伊奈波雄

黒田氏一封認、富永江頼む

三日

四日

織田氏并岡崎藩天野鎮三郎・長藩馬屋橋

五日

片山椿介

六日

◇太政官庁より御用有之間、病氣二候共出京
可致御達有之

(4) 出島竹斎(小
鹿村名主)か

七日

新見史雄

八日

寺田・最上・種田来訪

九日 柳原殿より来翰、是非共出府可致旨也

林三郎帰駿、富田貞次郎同道

十日 佐藤与之助(1)より一封

林・富田 伊達泰順、帰藩願として来る

十一日

富田貞次郎

十二日 白戸江富田之事頼ミ遣す一封、貞次郎子江附す

十三日 河野之来状富永より示さる、大久保殿之信あり

十四日

富田生沼津江出立、林三郎東京江出立す

伴鉄太郎

(1) 佐藤政養(海舟門下 三月十九日民部省鉄道掛となる)

十五日

最上・種田・寺田生来る、一昨一翁帰宅と云

◇松平勘太郎聞く、今井信郎糺問二付申口、卯之暮於京

師坂下竜馬暗殺は佐々木唯三郎首として信郎杯之輩

(3)本
(4)
(5)
之輩乱入と云、尤佐々木も上より之指図有之二付挙事、

或は榎本对馬之令歟不可知と云々

十六日

十七日

十八日

男谷勝三郎

十九日

酒井閑亭

廿日 知事殿沼津・小島辺江御出駕

中条金之助 平岡四郎十五日東京出立、昨帰

駿と云

(2) もと見廻組与
力頭 箱館降伏人

(3) 土佐藩士 慶
応三年暗殺

(4) もと見廻組与
頭

(5) 榎本道章(亨
造)もと目付、箱館
降伏人)

廿一日

林真介、元山形岩松、廿一年前男谷塾生

廿二日

松平勘太郎

廿三日

尾張鬼頭佐太郎

松岡万、小物之者之事等内話⁽¹⁾

廿四日

前田五門 石坂周三^(造)

廿五日

浅野次郎八、東叡山御霊屋御女子之分取たゝみ可申旨、凌

雲院申出旨相談 日光山之御所置、戸田大和十七日迄二被

仰出候旨被申聞、周旋之所、空談と云

廿六日

大木見元七⁽²⁾ 井上八郎聞く、昨年佐渡より銀五百貫

(1) 静岡藩開墾掛
並、製塩方頭

(2) 大儀見元一郎
(静岡藩藩政補翼手
付)

箱館之者百七
十人到着、残り
二百人は東京

目出ると、慶長已来之出方也と云

廿七日

溝口八十郎、木綿御茶被下置 津田・伴江飯塚之事
申遣す

廿八日

津田真一郎、道家帰一之事話有之

廿九日

男谷勝三郎 井上八郎 酒井 西周介 江原素
介

五月朔日

矢口謙斎・山高哲 (5) ○東京佐藤并黒田殿江一封
認送り方松平江頼遣す

二日

三日

大久保一翁

(3) 津山藩士も
と神戸海軍塾塾生

(4) 江原素六(静
岡藩少参事、軍事
掛)か

(5) もと昌平坂学
問所教授方出役頭取、
箱館降伏人

にて取調と云

四日 小松新之丞

能勢益堂、生活出来難きに、何とか取計呉候様申聞

人見勝太郎・梅沢鉄太郎、志を立西国江留学いたし度取計

くれ候様申聞

五日 河野左門、一昨日帰府之旨

人見・梅沢・和田金三郎、明日頃大坂江遊学いたし候旨也

六日

最上五郎 山高鉄三郎⁽⁴⁾、金子無心申聞ル 牧野田三

梅沢・人見

七日

八日

梅沢鉄三郎・人見勝太郎江、村田新八江之一封并金子

九拾兩使す 立田政吉郎

九日

富永雄造、明日東京江出立之旨

(1) 人見寧(もと遊撃隊士 箱館降伏人)

(2) 梅沢鉄三郎

(敏) 孫太郎の子息

(3) 和田助三郎

(もと) 遊撃隊士、東北で降伏) か

(4) もと遊撃隊士、東北で降伏

(4) もと遊撃隊士、東北で降伏

十日

山高八郎、十三日頃東京出立之旨

十一日

最上・種田・寺田之三子

十二日

山高哲 馬屋原

十三日 黒田了介より返書、出府可致旨

山高出立ニ付拾兩渡す 惣左衛門 赤松静兵衛

服部綾雄、増扶持并地税之相談

◇大政官より、忌明二候ハ、早々出府之御達有之

十四日

十五日

十六日

十七日

馬屋原 飯塚簾作

(5) 山高哲

十八日

因州原六郎・河田佐久馬(1)より来書、同藩之内陸

軍心得居候者両三人借用いたし度旨

溝口八十郎、人參金五十兩種々之手当ニ可致旨

藤沢 松平勘太郎

十九日

由利源十郎(2) 織田泉之

廿日

阿州侯より使、直書、中島央来る、陸軍惣督に成るへき

人物并操練教授之者御借受成され度旨、一翁・藤

沢江申遣す 牧野田三、藩人員住居之員数等書付

持参

廿一日

酒井閑亭・大久保一翁、因州江御借し被遣候者

中山謙八・房間虎次郎可然と云(3)

(1) 河田景与(京都府大参事、留守判官 鳥取藩士)

(2) 由利元十郎(もと遊撃隊士 静岡勤番組之頭並)か

(3) もと書院組頭取、静岡藩田中小学校数学教授方並

阿州侯江之返事、渡辺江為持遣す

津田真一郎 藤沢長太郎

廿二日 河野左門

最上・種田 向山⁽⁴⁾黄村、三田⁽⁵⁾箕麓之事内話

廿三日

片山椿助 新見文雄 浅野次郎八・服部綾雄・

戸川平太三人江、朝鮮・対州之書物差越方談ス

廿四日

渡辺央・三田箕麓 浅野・服部より中台氏之書留⁽¹¹⁾

借用 柳原殿⁽¹²⁾ 因州原六郎江一封差出ス

廿五日

藤沢長太郎

廿六日

渡辺央、阿州江石井新八・小山弥吉・原新七郎・熊醇^伊一郎

借候旨決定 津田真一郎・西周助御呼之処差支候間、可然

(4) 静岡藩少参事、学校掛

(5) 静岡藩学校掛三等教授

(6) 石井至凝(沼津兵学校資業生)

(7) 原胤列(もと歩兵頭並 沼津兵学校資業生)

(8) 小山教能(もと陸軍小筒組差図役頭取)

(9) 沼津兵学校資業生

(10) 伊熊淳一(もと小筒組差図役並)

(11) 中台信太郎(静岡藩少参事、刑法掛)

(12) 柳原前光(四月二十三日外務大丞となる)

含呉候様 三田箕麓

廿七日

室賀竹堂、本所大徳院同道、(原力)榛屋志之内話

渡辺央、明日出立之旨

廿八日

片山椿介 紺屋町御住居より白縮拝領

廿九日

晦日 六月 (箱根力)箱館 二日 ◇三日 着

四日◇大久保殿窮民所置之事、金札西洋人贖札多く造り大害之話有り、

藩邸江届いたす ○大久保殿江参る、退職之事申立

富永雄造 林三郎 山岡氏 島津帯刀

五日

樋口真彦 (2) 中島央 (3)、借受之者へ相応迄出立見合

呉候様申聞、西周江一封認渡す便ニ向山黄村

沼津 魚屋
小田原 新三善屋
程ヶ谷

阿州にて知事殿
出府中、兵隊、稲田
之邸を襲ふ、殺傷
十九人程と云、稲田は
藩士慎て手向ひせず、
又阿之隊長申訳之為
五六名割腹すと云

(1) 稲田邦植(徳島藩家老)

(2) 鹿兒島藩士
(3) 徳島藩士

樋口真彦
田中左内
樋口源介

宅江一封頼む 山高慎八郎

七六日

林三郎 原田八郎左衛門 川村権七 大崎昌庸、

小野石斎之話有之

七日

柳原殿・宮木氏、朝鮮之事其他御内話

小田均一郎 妻木多宮 岡部丹陵、心得内話す

八日

信田歌之助 川勝真蔵 湯地次右衛門外巻人

九日

妻木より、御下問御答草為見る

川村兵部大丞、辭職之事ニ而大久保殿口上且懇

話 山岡鉄太郎 川島新之丞 能勢益堂

林三郎

十日 不快、来客江面会断

(4) (5) 会津藩
士

(6) 大崎弥一郎
(長瀬藩士)

(7) 宮木鳴

(8) 妻木務(静岡
藩権大参事、公議人)

薩人三人、別二
式人
名代人登 營
可致旨 御達

願之通御役御免、
滯京可致御書付
名代蟻川氏出る
と云

熊本
古庄幾太郎⁽⁶⁾
武藤猪之助⁽⁷⁾
薩藩士
三人
原小太郎

十一日 水穂屋卯三郎 宮崎謙蔵

十二日 東条江公用人名代之事頼遣す⁽¹⁾

岩野從五位殿 横田外兩人 宮島誠一郎⁽⁴⁾

十三日 原田八郎 制銀、大久保殿江為見

公用人差出候所、不相濟旨東条申聞る、山岡

江明日名代之所頼遣す

林三郎明日静岡江出立二付、宅状

十四日 仏人を支那人天津橋二而暗殺之風聞

堀田希逸 桜井於龜、五両遣す 宮島誠一郎

新保新外老人 卯三郎 山岡氏⁽⁵⁾

十五日

原小太郎⁽⁸⁾

十六日 竹内半介 津田江一封、山岡江頼

山岡、本日出立之旨、且上野之転末、関口脱走を鼓

し、官員暗殺之風聞を為せりと云

(1) 東条悦三郎

(静岡藩公用掛公用
方中役)

(2) 石野基佑 (大
学校生徒) か

(3) 横田勤次 (肥
後藩士) か

(4) 待詔院下局出
仕

(5) 新保朝綱 (米
沢藩大参事)

(6) 古庄一雄 (大
学校生徒)

(7) 武藤巖勇 (同
右)

(8) 延岡藩士

十七日

富永雄造、増扶持之書付一見

十八日

吉利・川山(鳥之)・黒岡・金沢 原六郎(9)、雇人之事申聞

十九日 於国江五両遣す

千葉重太郎、原氏沼津江出立二付、御借受人之事、西・

藤沢江一封認渡す 畠山潮平(10)・千坂某

廿日

和歌山山本弘太郎 「川畑退蔵(11)

万里小路殿明日頃蝦夷江御発駕之旨御話(13)

富永雄造、上野御墓之事二付、榎本輩乱妨と云

廿一日 佐野より文通

芝之役僧念達 佐野栄寿左衛門 能勢益堂

薩兵隊兩人、河島新之丞書生之事頼ミ申聞る

盛岡公用人奈良真心 織田、小田原書生留学之事申聞

向山より蝦夷
之書付来る

(9) 鳥取藩士

(10) 上杉勝賢(大
学校生徒)の変名

(11) 和歌山藩権少
参事

(12) 鹿兒島藩士
大学校生徒

(13) 万里小路通房
か

廿二日

山本弘より国産 盛岡藩佐藤昌蔵

北村快蔵 熊本藩宮崎八郎 黒岡帯刀外

老入

廿三日 川村江頼ミ、岡部江山舟之書幅返却

薩
宮内雄蔵⁽²⁾
久保武之助⁽³⁾

佐藤与之助、明日大坂江参り候趣、鉄道之事二付、伊藤⁽⁴⁾

俊助外同行と云 長藩竹田庸次郎英国より帰り

来り出仕被 仰付、英語甚宜敷出来候旨也

広沢富次郎⁽⁶⁾

富永より帰藩并脱走之者増扶持之書付来る

廿四日

紀
中尾捨吉
山本介六郎

竹内半介并同役三人、渡辺氏塾入之承知之旨申聞

廿五日 伊東友四郎江日下部之事申遣す、妻木江届方頼ム

佐土原侯より唐紙到来、児玉二頼、米国江一封出ス

駿府より桜井貞蔵、高足丸便^(行速)二而届物、米国之書

富田貞次郎
肥前生某
村地才一郎

(1) 宮崎滔天の兄
東京遊学中、西周塾
に学ぶ

(2) 宮内勝海(大
学校生徒)

(3) 久保春景(同
右)

(4) 伊藤博文(大
蔵・民部少輔 山口
藩士)

(5) 竹田春風

(6) 広沢安任(斗
南藩少参事)

(7) 福井藩士

(8) 日下部太郎
(福井藩士 明治三
年三月米国で死去)

(9) 児玉章治(佐
土原藩士)か

(10) 静岡藩航運方
俗事重立取扱

栗原正人

仙台

岩淵英喜

池田吉左衛門

肥後

横田勘次

萩 認物

三戸湖次郎

富田貞二郎

大内静雄

無心申聞、五兩

遣す

状到来 ○庄内岡田斐雄江学費之事申遣す

一封、東条江届方頼ミ遣す

小笠原從五位殿⁽¹¹⁾

山高慎八郎、上野之所置困却之相談

廿六日

山高慎八郎聞く、小林甚六・岡部丹陵、駿州江被呼たり

と ○大徳院僧、榛原之事、近日沙汰可致旨

佐野栄寿左衛門、海軍之事相談

廿七日

岩田平作、製鉄局山尾江頼、名札遣す⁽¹²⁾

志田歌之助 小林甚六郎 小菅辰之助、弁解⁽¹³⁾

之話并心裡相頼出事

廿八日 向山并政殿・宅状、川村江頼む

肥田浜五郎聞く、支那江仏郎西より五ヶ条、所謂太湖之

両台場可相渡、「償金一億フラン可差出」天津江仏郎之

(11) 小笠原忠忱
(香春藩知事)

(12) 山尾庸三(民部・大蔵権大丞、横須賀製鉄所事務取扱山口藩士)
(13) もと開成所組頭・砲兵差図役頭取、工兵頭並 箱館降伏人

北村快藏⁽¹⁾
静岡行之旨

薩藩兩人

藤之母五兩
遣す

星川三平
無心ニ来る

河鱸從四位内
岩崎競⁽⁶⁾

薩州兵隊
三人

兵隊差置、入費支那より可差、「殺傷之暴人五百名、

斬首可致等之掛合なりと

石井藤三郎、⁽²⁾ 渋沢徳太夫江同人并渥美生之事御届
相成候趣

尽力之事頼一封遣す

廿九日

此頃四・五日中午、熱度九十五・六度ニ到る

七月朔日

川村大丞江、⁽³⁾ 浜武之事出仕被 仰付候様頼状出す

杉山彦太郎

二日 吉兵衛より五拾兩受取

岡部丹陵、明後日頃出立之旨 於幸父より礼状

会津藩伊東源介外老 人 中山又左衛門

三日

佐野より、蒸気車道之事建白草稿一見、否可

すへき旨申越

(1) 小田原藩士
大学生徒

(2) 渋沢栄一(民
部省租税正)

(3) 川村純義(兵
部大丞 鹿児島藩士)

(4) 浜武慎助(十
一月海軍兵学寮大得
業生となる)

(5) 河鱸実文(三
条実美の弟 東京府
出仕)

(6) 大学生徒

草加在下谷塚村
鐘五郎

宮内雄蔵
久保武之助

川島新之丞
大山弥介
宮崎謙蔵

四日 桜井於亀

信太歌之助^(マ)究迫之旨二付、十兩遣す

毛利恭助 宮島誠一郎

五日 お亀江、黒川伝次郎江一封届方頼む

竹島良作 富田貞次郎、明日頃沼津江出立之旨

石井義郎

六日

山本弘太郎⁽⁷⁾ 阿部丈策 川勝真蔵より来翰、建白

草稿為持越す 監督肥後人加悦平之丞外老人

七日

牧野田三、一昨日着之旨

久留米堀江、外国行いたし度旨

八日 男谷江一封、役場之事申遣宅状

黒岡帯刀、海軍学徒留学之事内話

富永雄造、十二日出立帰郷之旨、人減之話あり、静岡

(7) 和歌山藩士

(8) 大山巖(鹿兒島藩士)

川畑退蔵

斗南藩

平尾豊之助

草莽

服部滝雄

十一日早朝来り

被召抱度旨申之

練馬在

杉邑源蔵

元古田新十郎隊

下役

西条藩

宇高強蔵

篠原弘三郎

カラフト江行く旨

よりは別段不申越、牧野田三持参之書付持参る、并

百両知事殿より借用いたし置

九日

兵頭大八郎⁽¹⁾

十日

富永雄蔵、人滅伺之下案相談之事、静岡江

一封認遣す ○能勢益堂

原小太郎

十一日

増上寺より中元砂糖 卯三郎 道家帰一、聞く

同藩士植原六郎左衛門は辰年会津落城、国許にて割

腹死すと、其前国江帰りしに、被取囲居たりと云

原より唐本借用

十二日 米沢より綿・束脩四十両

土州^(ママ) 捨吉近々帰国被申付と云

(1) 新谷藩士

(2) 津山藩士も
と神戸海軍塾塾生

豊津藩

大参事⁽³⁾

同

吉沢少参事

若山^(和歌山)

小浦新三郎

大井栄之助

米国、彼六月
出之書状到着

信州松代

管

溝口八十郎より金札一箱、大山勝三郎持参

十三日

下村桂太郎⁽⁴⁾ 林有造⁽⁵⁾

十四日 盆之附届遣す

土奥宮猪佐馬外一人⁽⁶⁾ 佐野寿左衛門^(柴欠力)五分一之事不被行、

并鉄道之議御採用六ヶ敷かるへき旨内話す

十五日

池田吉左衛門 金沢良斎

小野友五郎⁽⁷⁾

十六日

湯地次右衛門^(治) 伊東四郎左衛門

十七日

静岡より来状 室賀竹堂より来状 夜種田・最上

両生、密事ニ来る

十八日

(3) 平井淳磨か

(4) (5) 高知藩士

(6) 高知藩士 大
学校生徒

(7) もと勘定奉行
民部省鉄道掛

佐久間恪次郎之事内談

岩尾作左衛門

薩州兵隊
三人

同大砲隊二人

石井源吾⁽³⁾

元酒井雅榮家来
田村弘介
当時英十六番
二居通弁、信太
之姪

堀田希逸 富永雄造 黒川伝次郎 能勢

益堂 ○神田好平⁽¹⁾_(孝)

大山勝助、静岡へ之届物頼_み、預置

十九日 終日暴風雨 七拾三度_{バロ}

米沢兩人

廿日

大久保殿江参、司農功者之者之事并川勝氏、及ひ

藩人減、日光又會藩之事、銀制之事等内話

竹田庸次郎留守二付不経面會

廿一日 仏参

富永江大山氏之届物頼遣す、藩人減、日光之

事并五分一賦税之事等申遣

鈴木半造、高木之書、岡田江届方頼む⁽⁴⁾

島津帶刀 原田五郎右衛門、大久保殿五・六日帰国見合候様
被申聞と云

廿二日

薩人三名 信太歌之助

(1) 集議院判官、
制度取調掛助

(2) 大久保利通
(参議 十日民部省
御用掛となる)

(3) 鹿児島藩士

(4) 静岡藩公用掛
公用方下役

肥後

福田抱一

毛利莫

薩州兵隊三人

平岡健

⁽⁵⁾小松帶刀病死
と云、横井生之話

平兵衛^江廿兩
遣す

石川源吾
樋口真彦

廿三日

福田抱一之親は肥後之師家也と云、毛利之親は豊後

鶴崎師家也 岩男^尾作左衛門外老人

廿四日

薩生二人 高須藩二人 川勝新蔵より文通

廿五日

兵頭大八郎、井伊家渋谷重太郎之事話す

廿六日

大崎弥一郎 福田半蔵 横井大平 島津帶刀

中尾捨吉、十九日頃帰国、暇乞 杉亨二

児玉⁽⁶⁾ 来月英国江留学、啓殿江話呉候様申聞

廿七日

徳島知事殿より手翰、小室信太夫持参⁽⁸⁾

杉亨次、建言草稿持参⁽⁹⁾

廿八日

⁽⁵⁾ 鹿児島藩士
七月二十日死去

⁽⁶⁾ 児玉章吉(佐
土原藩士)か

⁽⁷⁾ 島津(町田)
啓次郎

⁽⁸⁾ 蜂須賀茂韶
(徳島藩知事)

⁽⁹⁾ 徳島藩大参事

大宮貞次郎
薩生三人

徳島

伊月平一郎
奥井庄介
鈴木真八
黒部陳平

和歌山生

二人

松江

奥田周蔵
金沢藩

丸田秀実

斗南

豊之助

肥後藩

兩人

米沢

桜正太郎

白峰駿馬、米国之話并宮様近々米国江御出二付御供
可被仰旨内話也

大久保殿江行く、川勝并杉之記差出、會計之者姓名、
小林・能勢之事内話、吉井氏二逢ふ、同人選人之内
話有之、地力を尽すへき事を云ふ

廿九日

薩州より梅沢・人見之書状達す

徳島藩江知事公之返書并沼津西周江一封渡す

肥田江、内田并浜武土木局江周旋之事頼遣す

晦日

大久保殿江赤松之事、吉井殿江井上并太田之事申遣

梅沢之手紙、山高江届方頼む 梅沢より来状、学費被下旨

赤松大三郎、昨民部権少丞被 仰付候所、素意も無之

間御免願云々之話 井上如水、日光之事内話

横井大平明日帰国之由 岡部丹陵、静岡表所領

替紛雜と云

(1) 長岡藩士 海
舟門下 もと海援隊
士

(2) 華頂宮博経親
王(東隆彦)

(3) 吉井友実(民
部少輔 鹿兒島藩士)

(4) 梅沢敏(もと
遊撃隊士 鹿兒島藩
へ遊学中)

(5) 人見寧(同右)

(6) 浜武慎助

(7) 赤松則良(沼
津兵学校一等教授方
七月二十八日民部権
少丞となる)

(8) 山高鏃三郎
(もと遊撃隊士) か

(9) 平尾豊之助

(10) 大学生徒

古海初衛⁽¹⁾

此月二入八十五度
より九十三度熱也

熊本

古沢吉九郎

内藤貞八

鷲屋新七

海江田殿旅宿

本多敏三郎⁽²⁰⁾

永田研吉

和田乘太郎

新納清一郎

八月朔日

川島真之丞聞く、薩藩士横山正太郎政弊建言、
集議院前にて割腹すと、至正誠大之氣可感也

安井丹三 川村殿江一封認遣す

二日 黒田殿之船上総ニ而破船、乗組無別条と聞

島津帯刀・湯地治右衛門 大久保殿江一封認渡す

岡田斐雄、⁽¹⁴⁾太童之事、⁽¹⁵⁾留学之金子之事談す

三日

聞く、肥後にて知事殿憤発、大二改革あらむとすと云

四日 雨天秋冷

宮内雄蔵、⁽¹⁷⁾聞く、⁽¹⁸⁾海江田武次殿着府と云

中村半次郎行き、梅沢・人見之礼申述る、且届状頼む

海江田武次を訪ふ 荒井某二面会

五日

西郷新吾、⁽²¹⁾一昨日帰府と云、⁽¹⁸⁾昨欧米周行
静岡江御信牌届方、山高江頼む 能勢益堂

(11) 米沢藩士 大
学校生徒

(12) 横山安武 (森
有礼の実兄)

(13) 湯地定基 (八
月二十五日アメリカ
留学)

(14) 庄内藩士

(15) 大童信太夫
(仙台藩士)

(16) 細川護久 (熊
本藩知事)

(17) 鹿兒島藩士

大学校生徒

(18) 海江田信義

(鹿兒島藩士 八月
十九日奈良県知事と
なる)

(19) 桐野利秋 (鹿
兒島藩士)

(20) 本多晋 (もと
彰義隊頭取 民部省
出仕)

(21) 西郷従道 (鹿
兒島藩士 隆盛の弟)

薩

植村彦五郎
吉田喜之助
伊瀬和正左衛門
蒲生彦四郎
川島真之丞

高取藩

東省三

高松

大西讓三

真島

小川無嘉意

薩

汾陽尚二郎

永田研吉

飯塚廉作

弟 從松

相良雄之丞
川上宗之丞
郷田正之丞

宮島誠一郎、雲井田三之事内話

六日

江口純三郎 肥前遊歴之士田中覺太夫・深江文
吉郎 ○杉亨二 梅村氏、南校大丞之事内談

七日

柴誠一、佐野氏江大体不服之旨承る
薩相良直太郎・宮里佳左衛門

八日

種田方江一封差立(但川島より之頼状也) 堀田希逸 青山
小三郎江一封頼状渡す 橋爪正一郎、関口之事段々申
聞ル 手島敬児、尾州江被雇候旨

仙台藩林権少参事、富田之礼として来る

九日

高鋭一 田中左内 石井貞之允倅録太郎
肥後寺野幾次郎より書状

(1) 雲井竜雄か

(2) 大学校生徒
(3) 民部省出仕

(4) 種子田清左衛門 (鹿児島藩士)

(5) 青山貞 (東京府大参事 福井藩士)

(6) 橋爪正英 (静岡藩権少属 箱館降伏人)

(7) 関口隆吉 (金谷開墾方頭取格)

(8) 富田鉄之助

(9) 斗南藩士

菅鉞太郎、恪次郎之内話

十日

山口藩
政之助俸
周布金槌⁽¹⁰⁾

島津帶刀⁽¹¹⁾
山本吉蔵⁽¹²⁾
有馬早右衛門

十一日

柴誠一、紀州家にて雇度旨申聞候由 ○周布云、太
田一之丞と云、同藩、敵島にて先年逢候人、欧米を周
り帰国せりと ○中村六三郎⁽¹²⁾

柳河十時嵩⁽¹³⁾・安東多記 土州奥宮周次郎

海江田武次 原小太郎

十二日

卯三郎 福井并薩生兩人 近藤誠一郎塾之者

十三日

山本生⁽¹⁴⁾ 石井義郎 中山又右衛門・赤羽市之丞兩人

山川、⁽¹⁵⁾ 広沢之奸情内話⁽¹⁶⁾

十四日 薩 海原貢助・児玉一郎

白峰駿馬 石坂周三^(選) 林三郎、本日出府

米沢
小田切右衛門太郎
桜井銃次郎
桜正太郎
長井重助

美代幸之丞
薩
相良勇介
坂本十郎太
土師壮八郎

石井源吾
川島新之丞
田中周蔵
萩原張八

(10) 周布公平

(11) 大学校生徒

(12) 中村則秀(もと長崎海軍伝習所伝習生 大学中得業生)

(13) 柳川藩士

(14) 山本弘太郎

(15) 山川浩(斗南藩権大参事)か

(16) 広沢安任(斗南藩参事)か

豊前人

村上杏介

薩

上村彦之丞

永田研吉⁽³⁾

仁科貫一⁽¹⁾

宮内雄蔵⁽³⁾

仁科貫一

薩

岸良真二郎

黒岡帯刀

湯地次右衛門

上村彦之丞

洋行之事

必死之話

左近允善兵衛⁽⁹⁾

洪江軍兵衛⁽⁸⁾

肥後

杉谷圭太

尾藤嘉五郎

十五日 昨三郎持参、柳川十時・大村より静岡江書生頼状⁽¹⁾

肥後大田黒亥和太・内藤貞八・杉谷圭太・古沢

吉九郎

十六日 布施之隠居・伊東隠居、難渋之旨申聞ル

小室信大夫、明後日出立之暇乞 服部綾雄、一翁昨

日御用二付出京被仰付旨 石川渡⁽⁷⁾、司農良吏

并職手御雇、布施氏転末之事談

十七日

川村権七、丹陵之事頼む

十八日

白峰駿馬、小鹿江端物三疋届方頼む、亦鶴殿団二⁽⁸⁾

草稿刻之儀被頼 日下薩蔵、長崎より支那江行

くに龍堂江一封認遣す

山田均一郎、業前并地方其外出来候者借用之旨申聞

十九日

(1) 大村務

(2) 大田黒惟信
(横井小楠門下)

(3) (5) 大学校
生徒

(6) 小室信夫(徳
島藩大参事)

(7) 石川利行(静
岡藩権少参事、監正
掛)

(8) 鶴殿団次郎
(長岡藩士 白峰駿
馬の兄 明治元年死
去)

(9) (10) 鹿尾島
藩士 大学校生徒

湯地一二

寺田平之丞(通)

川島新之丞

黒岡帯刀

種田清左衛門

山本権兵衛

太田黒亥和太

外式人

湯地一二

岩尾作左衛門

尾藤寛太

道家婦一

黒岡帯刀

上村彦之丞

永田研吉

寺田平之丞

種田清左衛門

外四人

有馬早右衛門

永吉藤五郎

東条正左衛門

湯地藤次郎

① 九一江写真に行く 卯三郎、団二子之草稿出版ヲ話

廿日

佐土原侯より縮緬目録(録) 菅鉞太郎 山高慎八郎、明

出立之旨申聞、減俸金并増扶持、紀州江借者之事申遣

佐土原三浦十郎、西江留学ニ付、栗本江一封頼状

渡す ○布施家内江、扶持方受取之書付遣す

○杉亨二、紀州江参り度旨申聞る

廿一日

川村江行く、留学生之事、佐久間并慎助之談す

廿二日 男谷・小曾川より来状

岸良七之丞・小牧善二郎・伊地知清次郎(12)

林三郎、明後出立之旨 渥美新作(13)

廿三日

駿河江林二頼、反物・傘遣す ○布施之御扶持方受取

之事、石井江一封塙ニ渡す 平岡健

(11) 内田九一(写真師)

(12) 岸良兼養(弾正大巡視 鹿兒島藩士)

(13) 鹿兒島藩士 大学校生徒

(14) 大学校生徒

鶴殿団二郎

養義

藏書は白峯

駿馬蔵と認

呉候様申聞

木藤生

道家婦一

桜井貞蔵

伊東安衛倅

最上五郎

種田清左衛門

八木新兵衛

西野三郎

服部綾雄

中沢貞次郎

肥土 一人

柳河 大村源造・笠間益三・椿原敬蔵・岡啓三郎

岡氏、外国船乗り稽古は如何と云

廿四日

白峰駿馬、団次郎著書彫刻料百両預り 小拙写

真岩倉様初、届方頼み 荒井次郎、洋行之節加江

相成候様頼む ○近藤周行江、山本弘太郎之手紙渡す

米沢小川源太郎・今井吉次

廿五日

菅鉞太郎、本日松代江出立、恪次郎之事申聞

湯地治右衛門、明日横浜江罷越、其俣米行、倅江伝言頼む

佐野榮寿、軍局不振之内話

廿六日

杉山秀太郎

廿七日 一翁近々出府之内状相示さる

深江文吉郎江、浜口儀兵衛并津田又太郎江紹介認遣す

(1) 笠間讓(柳川藩士)

(2) 岩倉具視(民部省御用掛)

(3) 佐賀藩士

(4) 津田出(和歌山藩大参事)

薩兵隊二人

宮内雄蔵

久保竹之介

上村彦之丞

宮内雄蔵

最上 種田

最上五郎

種田清左衛門

宮内雄蔵

宮内雄造

竹内半介

児玉章吉・町田啓次郎、本日横浜江出發、明日外国行

俾并島津又之進殿江二封渡す

廿八日 柴田栄

海江田より伝言、明日出立と云 ○慎助、海軍所

出仕被 仰付

廿九日

宮内、静岡江留学致度申聞

晦九月朔日

薩兵隊三人 米沢大滝外老(8)人 寺田平之進

二日 於亀

山岡鉄太郎 安川権少史(9) 豊津小川太郎 福山藩

大森鑑爾 建白書一見頼置 竹内半介

三日

島津帯刀 永吉藤五郎(10) 一翁着府之旨、家来

差越 谷束村鐘五郎(ママ)

(5) 佐土原藩士

(6) 島津忠亮(佐土原藩知事島津忠寛の長男)

(7) 鹿兒島藩士

(8) 大滝新十郎

(9) 安川繁成(太政官権少史)

(10) 鹿兒島藩士

大滝新十郎

日田創

黒岡勇之丞

薩兵隊

二人

米国より来状

島津帯刀

能勢益堂

肥田浜五郎

江田平介

鳥山

塩谷金二郎

尾州

山口逸平

四日

佐野より今夕可参旨申越、断遣す

五日

一翁江手紙遣す

八木新兵衛写真遣す、学問修行静岡江参り度旨

佐土原立山伊平、町田・小曾川之勘定請取、且彦子

旅費三拾兩預り置 ○宮内雄造、本日駿河

江出立、相原江参り候由申聞

六日

宅より着服届越、一翁に持参

仙台小野伊右衛門書状云、仙台藩五人魯国江遊学、国許離改

革出来と云

会人馬島当時小松証治貰受たりと云

山本弘太郎明日帰国と云、国政二付内事相談、且人物借受度

旨申聞

七日

塩谷・山口、^(マ)究迫之旨にて達而無心申聞、六兩助力す

大童信太夫、国許より探索いたす二付潜伏すと云

(1) 小野寺魯一ら

八日 嵐

馬島瑞園

九日

莊村一郎、横井太平書状持参、寺田氏近日駿河江行之趣 大場一平、国許之事致す由内話

十日

志筑藩本堂銃太郎、入塾いたし度旨申聞

十一日

大久保⁽³⁾、明日御用召之旨文通有之

熊本内藤貞八 最上五郎・種田清左衛門

汾陽已下三人暇乞 鐘五郎 西野三郎 田中左内

因州人某、巡察使也

十二日

鈴木清兵衛、難渋之旨申聞せ候二付、種々申論、

金子無心二付、三両貳分在合遣す

人吉藩
丸目政吉

上村
郷田正之丞
川上宗之丞
相良雄之丞
顛川徳之助
吉利祐介
佐賀
馬渡峰之助
柳河
戸次誠一郎

(2) 大学校生徒

(3) 大久保利通

(4) 丸目政平(大
学校生徒)

士 本堂銃太郎
川島新之丞

十三日

杉亨二、明日頃駿河江出立と云

千本弥三郎⁽¹⁾

十四日

黒川伝次郎 駿河より岡田斧吉相統二七郎願立候旨⁽²⁾

滝村小太郎より文通⁽⁴⁾

十五日

久保竹之助、本日渡辺方退塾と云 卯三郎

大徳院榛原献金は見合、千両無利足御用立度

旨申聞る

十六日

近藤熊吉、難義之旨申聞る 大田黒亥和太外

兩人、国政改革之内話

竹田庸次郎 塩田三郎⁽⁵⁾、同人近々鮫島氏⁽⁶⁾と同行、

英国江出発と云

(1) 福井藩士

(2) もと遊撃隊士
箱館戦争で戦死

(3) 海舟の四男義

徴

(4) 滝村鶴雄(岡
田斧吉の兄 家達付
家扶)

(5) 外務権少丞
順庵の子

(6) 鮫島尚信(外
務大丞 鹿兒島藩士)

黒岡帯刀
留学之事、
大久保殿江
一封認渡す

長谷川善兵衛
改名又六

柴田承榮

北垣晋太郎⁽⁸⁾
副田美佐雄⁽⁹⁾
木村宗三

紀

竹内半介⁽¹⁰⁾
橋爪庄一郎⁽¹⁰⁾
筒井治兵衛
亀井鰐一郎

十七日

東条悦三郎、藩制被 仰出之写持参

十八日 晝より嵐、先日之より少

肥後平野武次郎⁽⁷⁾

十九日 平兵衛廿兩

廿日

服部綾雄、知事殿二百兩御恵被下、「テリカラーフ之事

并千兩御借申上候者之事、溝口江差向遣可申事等

談す

廿一日 宮木氏、美濃部家属之事申聞る

井上八郎、遠州にて地方求、往々撫育之手当ニ操入

候代金として千兩渡す

宮木鳴、柳原様支那にて上海之定約御取結ニ相成、

万事御都合宜敷旨内話、且御口上有之

○飯塚從松⁽¹¹⁾、米国江参り候ニ付金子無心、但同行篋⁽¹²⁾

(7) 大学校生徒

(8) 鳥取藩士 正大巡察

(9) もと一橋家 臣 幕末に渡仏

(10) 橋爪正英 (静岡藩権少属)

(11) 浜松藩士

(12) 浜松出身 大学南校生徒

庄三郎参り候旨内話、歎願す

兼親父江

三両遣す

廿二日 仙台太童、松倉之事⁽¹⁾同人内話、召遣候様可然旨○
○奥州県官江話、頼遣す

安場一平御役御免、国許江明日出立、段々国政其他

之内話有之 ○小笠原鐘次郎より文通、三十兩

借用いたし度旨申越

廿三日 啓江五両無心申聞候二付遣す 竹内江杉之事申遣す⁽⁴⁾

○高橋甚太郎悴寛兒儀二付、勤番頭成瀬吉右衛門・上田作之丞江⁽⁶⁾

一封認遣す、当時手島敬兒同行、尾州表江被雇居候者共也

○小笠原鐘次郎より文通、金子無心之事申越候、返書遣す

○柳原様支那江一封写真差上、宮木江頼遣す

廿四日

北垣晋太郎 岩尾作左衛門 ○飯塚從松・寛某江

六拾両遣す 上杉家之大参事⁽⁷⁾、国政改革相談

廿五日 藤沢より来状、沼津学校因・阿教師半高旨申越

仙台・庄内江富田・高木、学費立替之事催促申遣

(1) 松倉恂(仙台藩士)

(2) 安場保和(九月十七日胆沢県大参事を免官)

(3) もと弓術師範・目付介 長崎海軍伝習所伝習生

(4) 杉亨二

(5) 成瀬蔵(相良勤番組頭並)

(6) 上田閑江(相良勤番組之頭)

(7) 新保朝綱(新)

(7) 新保朝綱(新)

馬島瑞円
原小太郎

平岡健
⑩ 豊田拙二郎
最上五郎
種田清左衛門
明後日静岡
江出立と云

⑧ 西周、兵部局并太政官より召二付出府、困却と云

松山藩村上佳津摩、教者頼度旨申聞

廿六日 於龜、弘物之代十九両持参

梅沢鉄三郎、村田新八之書状持参、薩州之内情

を聞く 原六郎 ⑨ 吉岡外務権少丞

廿七日

牧野田三来、初旬帰国と云、十勝返上之事申、無存意

旨申遣す

駿府江金札二箱・私用之唐本、黒川伝次郎江届方
頼ミ遣す、お亀江人附遣す

大久保殿江行く、墓参願度旨之処承知之返答

有之

廿八日

一翁江行く、出立後にて面会せず、一書を送くる、服部

に人滅之見込を云 赤松江尋ぬ、同人昨兵学大教授

被 仰付之由 ○肥後藩、静岡江留学いたし度旨

⑧ 九月二十八日
兵部小丞准席・学制
取調掛兼任となる

⑨ 鳥取藩士

⑩ 壬生拙次郎の
別名

⑪ 赤松則良（二
十七日海軍兵学校大
教授となる）

申聞る

廿九日

内藤貞八⁽¹⁾ 莊村一郎 岡田斐雄⁽²⁾

西周、兵局出役被 仰付と云、静岡より人多く御呼之様
子と聞く

晦日

高野山大徳院榛原嘉介千両御用立金之事、来春

差出度申聞

十月朔日

松山藩山本新一、明日帰国ニ付改革之事相談、荒増

書付ニいたし遣す ○新見夔蔵

二日

内藤貞八外巻人、明後日出立ニ付暇乞

梅沢鉄三郎、静岡江参り候ニ付無心、拾兩渡す

小笠原鐘二郎無心申聞、三兩借す

(1) 熊本藩士
(2) 庄内(大泉)藩士

於花廿兩

三日

中沢貞三郎他老人 田辺重明 津田真一郎

四日

高鋭一、近々帰国之旨 山岡鉄太郎 中村

六三郎 美濃部於愛より歎書、悴頼ミ度旨

五日

川島新之丞 渡辺寛蔵 政太郎

中山又左衛門、原田江一封頼む

六日

鈴木半造 堀江八十吉

七日

福井藩永見裕・原小太郎、明後日帰国、暇乞、井上

定太郎参り談度旨申聞る 田辺重明

八日

新保新、帰国ニ付暇乞 東条悦三郎

(3) 沼津兵学校留
学修行、生徒寮長

戸次誠一郎

岡田丑之助

足利

渡辺兼一郎

九日 橋爪弥太郎

宮木鳴、柳原殿清国より之御書翰持参、一見為致

大久保一翁、当月朔日帰着之書状

十日

西野三郎、難義申聞候二付五両遣す 小浦新三郎

十一日 両三日寒冷、雨蕭々

梅沢鉄三郎、昨静岡より帰府と云

十二日

浅野二郎八・服部綾雄、人減之事相談

十三日

岸良真三郎 朝比奈某 津田真一郎 西周

来訪

十四日

高知藩書生二人

十五日

(1) 柳川藩士

豊田拙二郎
黒岡帯刀

榎本弘蔵

美濃部倅
寄食

東島二郎

中村六三郎

川勝・能勢
之事、川田江
託す

明治三年十月十五日～二十日

浅野・津田江行、山岡二面会、能勢・小林出役
之事、北島江書付届方頼む 卯三郎江行く、清七、
黒川江口上書渡す

十六日

奥宮伊佐馬外老(猪)人 荒木卓爾 黒川養母 お亀

十七日

墓参并旧名主理右衛門方を訪ふ、旧借返遣す

十八日 お亀

湯地一二、東島二郎難義之情実内話、旅費

借用頼候二付、廿兩助力す

十九日

川田佐久馬(河)、明後日西京江出立、役人可然者之事内話

梅沢鉄三郎・堀覚之助同行可致哉二付、金子之事頼む

堤眠山、飯塚(土)従松之礼申聞る

廿日

(2) 奥宮正治(高知藩士 大学校生徒)

(3) 熊本藩士

(4) 弾正大忠 鳥取藩士

岡部丹陵、出立之日延相願度歎話

土浦

秋山和四郎 岩田平作土木出仕、武蔵船

乗組、明後清水港江行くと云

廿一日

岩田江頼ミ静岡荷二ツ遣す ○吉井江司農出

役之有無用伺二遣す

梅沢鉄三郎江六拾兩遣す 慎介

吉井江返書、近々来訪之旨申聞

廿三日

吉井江行く、司農心得居候者姓名并黒川伝二郎

之事内話す 大久保殿江行く

廿四日

黒田江蝦夷之取調書遣す ○陸舟龍堂并

堀江書状、中村江頼遣す 米国江出状、水穂屋

江頼む

(5) (6) 鉛筆に
よる修正 異筆か

【付屬文書】

①中根淑上書

上勝執事書

天之降仁人、豈独私其所可愛也已哉、亦及其所不可愛也、天下之庥人固衆而愛止其所可愛、則仁之所施已有限矣、必及其所不可愛而後仁之為用也始大矣、今夫江河之水發源東流、蜿蜒委曲經數千里之地而後入海、其間釣漁之所遊獵、舟楫之所來往、其利非不多也、然是未為尽水之用也、必築之堰堤以激之開之、溝渠以導之瀉之於數十百里之外、通漕沃田、而後水之潤沢始広矣、淑見天下之人、未曾有如斯其大者也、而今於執事独見之矣、戊辰之乱、執事掌軍職、往來於兩軍之間、天下之衆議輻輳乎一身、身与国危、志与事逆、而執事堂

堂不撓、終使我 德川氏之民再仰天日之光、其仁蓋多矣、易云、君子体仁足以長人、執事之謂也、然危疑之際、天下之人見執事者衆而皆不能悉其意也、是以毀譽百端、未知其孰是而孰非也、淑嘗一干執事議論乖戾、言或涉不敬、執事江海之量、宥而弗問也、然當時窃以謂、執事雖不我罪、必不我屑也、我亦必不就以謀事也、其後淑因事獲罪於 朝廷、東走西奔、纔達此地、達未幾、 朝廷不揣其愚懦無能為也、追索甚急、有司懼坐匿姦之罪、欲速逐之、當是時執事不以淑之不敬、戒有司曰、必莫逐焉也、 朝廷而有問、余必解弁之矣、嗚呼淑之有今日實執事之賜也、微執事、淑之肉不知今其在于何地也、於是乎、知仁人之愛人不独及其所可愛、又及其所不可愛也、且其以為不我屑之人為我緩其難、其以為不就以謀事之人為我謀其全、淑雖愚魯、独不内愧且感於心乎、在昔項羽已滅、季布隱于魯朱家、滕公為說高祖赦之、淑之賢固不及季布、而執事之仁遠出於滕公之上、雖欲報之、其若無及何耶、雖然仁

人之救人、豈為望其報乎、要使之亦尽其道而已、然則尽心奉職、忘身忠國、此則執事之所以望淑、而淑之所以報執事也歟、

曩屢辱問、而淑未能拜趨答命、茲上書以謝之、淑再拜

明治四年春正月某日

中根淑拜具

勝執事足下

②付箋

此卷抄録スヘキケ条ハ、朱紙ヲ点シテ表ス

其一条ヲ切トリ、若クハ数条ツ、ケキ取ル等ハ◇ヨリ◇迄ト
知ルヘシ

ケ条ヲ書取ルニハ、必ス其月日ヲ書クヘシ
月日ヲ書クハ素リ
故付紙ハセスアル也

③付箋

三日已下取らす